

● たたかう労働者階級のための総合誌・隔月刊

社会評論

第7号

金芝河論(130枚) = 野口寿一 ● 韓国民
主化闘争の展望 = 趙活俊 ● 科学から空
想へ = 早川修二 ● 記録映画「合理化病」



韓国民衆のたたかう知性

革命作家——金芝河の思想と文学

野口 寿一

はじめに

韓国の民主化と南北朝鮮の統一をもとめてたたかい、囚われた多くのひとびとが、朴政権の手でいま、殺されようとしている。

想像を絶する拷問にも屈せず、信念を貫き通したかれらのなかには、死刑を宣告する軍法会議の法廷に向って「光栄です」と言い放ち、微塵の動揺も現わさなかったひとびとがいる。

朴政権維持の目的で、思いもかけず「政治犯」に捏造されたひとびとも、生命を賭けてみずからの良心を守り抜いている。たとえば、完全なアリバイが立証され、起訴状が事実

よって否定されているにもかかわらず、最終審で死刑が確定した在日韓国人・崔哲教（チェ・チョルギョ）は、日本に住する妻や子供たちにあてた獄中からの手紙でつぎのように言っている。

△いざれ絞首台に立つ身であるが、その瞬間まで、外部の支援運動に呼応して闘うつもりである。この国の民主回復と平和的統一のために、はずかしくないけにえとなるなら、わたしにとって幸福であると思っている。（注）

歴史の前進へのゆるぎない確信、崇高な人間性、極限状況にあつてなお人間らしい愛情と勇気をゆたかに披瀝しているこのようなひとびとが、いまこの瞬間に存在しているのだ。サッコとヴァンゼツチやローゼンバーク夫妻やそのほか数多

くの実例をもちだすまでもなく、かつて、階級闘争の歴史の諸局面において酷い弾圧にたいして昂然と頭をあげて殉じていったひとびとが、そのあとにつづく者たちに敵階級への憎悪と、圧制とたたかう勇氣と、未来社会建設への決意を与え、強めてきたように、かれらもまたわれわれに、そうした人間的感情を改めてもたらしてくれる。

朴独裁政権と日本帝国主義を共通の敵としてたたかおうとするわれわれにとって、朴政権の監獄にいるかれらは、人類の良心とも呼ぶべき存在であり、どうしても救出せねばならぬひとびとである。

このことと関連してわたしは、最近、二、三の論者によるつぎのような指摘を目にした。

そのひとつは、在日韓国人の評論家で『民族時報』主筆の鄭敬謨（チヨング・キョンモ）の発言である。かれはその著書『韓国民衆と日本』所収の講演記録「詩人金芝河の世界」のなかで、理解ある日本人でも韓国社会の真つ暗な絶望とカオスだけを見がちであり、そこにはぐくまれつつある「希望」と、新しいメッセージの胚胎「を見落としがちである」と述べていた。もうひとつは、韓振（ハン・ジン）の発言である。かれは、在日韓国人青年同盟機関誌『ソング（先駆）』一九七六年五・六月号の書評のなかで、「韓国民衆の闘い、その思想性」を根底から学びそのうえで共同闘争を打ち立てようとする日本人の姿勢はこれまでほとんど絶無だったように思うと述べ、例外のひとりとして遠く石川啄木に言及していた。

またもうひとつ、小野利明が本誌五号の「韓国資本主義と二重構造論」と題する書評において隅谷三喜男著『韓国の経済』を批判したその締め括りで、日本の「民主的」評論家による韓国経済批判や韓国経済改革案に対置させて、米日韓ブルジョワジーと決死的に対決し歴史的使命をになって不屈にたたかい抜いている「韓国人民の知性」をとりだし、日本の「民主的」評論家たちの思想の貧困と経済分析のあさはかさを浮き彫りにしていた。

わたしがいま紹介した三人の論者がそれぞれ、「希望と、新しいメッセージの胚胎」といい、「韓国民衆の闘い、その思想性」とよび、「韓国人民の知性」と名づけているもの存在は、こんにち韓国問題に関心をもち、それにとりくみはじめた大方の活動家にとって、ほぼ疑いえないものとして理解されつつあるのかもしれない。だが、われわれと同時代にたち現われてきている韓国のたたかう民衆の知性の具体的な内容にまで立ちいたり、そこから学ぶべき教訓をひきだしてくる作業はまだまだこれからだ、とわたしには思われるのである。

そこでわたしは、いまのべた仕事の手始めに、韓国の民主化と南北朝鮮統一のたたかいの最前線にあって韓国民衆の知性を代表するひとりとして、キリスト者、非共産主義者、民族詩人といわれている金芝河（キム・ジハ）を取りあげ、かれの発言や作品のなかからかれの革命的生き方と思想を抽出する作業を行ないたい。金芝河の思想に学ぶことは、われわ

れ自身の思想をいくらかなりとも豊かにするだろうし、とくに、われわれ日本の若い世代には特別の意味をもつに違いないと考えるからである。

わたしは、以上の意図のもとに、この小論でははじめに革命作家としての金芝河の思想を紹介し、つぎにかれがみずからとのたたかいによってそのような自己を形成する過程をみ、そのうえでかれの作品のいくつかを選んで文学を武器としたかれのたたかいぶりにふれ、最後にわたしなりのまとめを試みるつもりである。

金芝河——ひとつの革命的人間像

この章で、革命作家としての金芝河をみていくにあたって、最近、日本語に翻訳されたかれの獄中手記「ソルジェニツインと私」(『文芸春秋』十月号)を、まず紹介しておきたい。一九七四年十月末から翌年一月末の間に書かれたと推定されているつぎの文章のなかに、ひとりの革命作家の思想と歴史意識と芸術観が凝縮されて表現されている、とわたしは思うからである。

ソルジェニツインはソビエト・ロシアの歴史的過誤の産物——その戦術的奸智の拡大した沈澱物としての数百万の亡霊の怨恨を代弁する。

闇に葬られた真実を明らかにすること、暴露へ暴きだすこと、V自体が重要な文学精神であり、時代精神であるとい

う点で、それは、立派なソルジェニツインの業績である。しかし、それをあまりにも拡大して、社会主義の歴史的功績、社会主義工業化の偉業にたいする全面否定へと(西欧反動の宣伝に加勢して)いつてしまったことは誤謬!

ソルジェニツインと私を比較する声が聞こえる。もし、前者のようなモチーフにおいてならば、共通点は「抑圧された者の恨み」と暗葬された真実(矛盾としての)を暴きだすことにある。

しかし、差異点は彼がスラブ主義や伝統的に古い牧歌の復古を夢みるかのように(赤裸々な暴露、糾弾の炎がもたらす感動を除外するならば)みえる点は、まさに私が糾弾してやまないところである。ロシアは進歩したのであり、さらに十月革命はこの地球の歴史のうえに巨大な希望の瞳を誕生させたのである。

その光が強烈なだけに、影も濃いのである。その今日の矛盾を剔抉、指摘して止揚しようとする角度においてソルジェニツインは認められるが、その光までもひどく傷つけようとする態度は糾弾されねばならない。

資本主義、植民地主義と古典的意味の暴政——分断——操作——抑圧の第三世界の《南》の人民たちの恨み、その悲惨な犠牲の亡霊たちの恨みにみちた真実を代弁するのが私の主題である。そして、それは《暗黒文学》それ自体としては成り立ちえない。

悲惨の歌のなかに、すでに光の福音が、革命の轟きわた

る未来像が孕まれた《抵抗と抑圧》の闘い、それ自体が私の芸術と行動の主題であり、抵抗の側が勝つという積極・能動的な行動の勝利の信仰が私の精神の本質である。これが差異の本質である。

○すでにある矛盾の破壊↓牧歌の復古↓ソルジェニーツイン

○既存矛盾の破壊と牧歌の否定↓新しい社会（人間化された革命）建設の信念の鼓吹と楽観↓私の芸術

ソルジェニーツインが自然主義的、ほぼドストエフスキの暗鬱な事実矛盾への穿鑿せんさくがその形式であるとき、私の芸術の基本特徴は圧縮、典型化、政治的想像力によって全民衆の《悲惨とその克服》、または《矛盾対立とその統一および建設》の強力な楽観主義の鼓吹、伝播なのである。

それゆえに、私の文学は自然主義にも反対する。私は新しい時代の新しい感受性を要求してその予兆を想像力のみで、より成熟させた点に特徴がある。

われわれは社会主義以前にあり、世界は社会主義の歴史的限界をも経験したのであり、私はソルジェニーツインより若いのだ。そして、私は道化した楽観主義者である。

しかし、恨みの司祭という点では同一であると考えて。▽冒頭から長い引用になったが、金芝河がみずからの文学について語ったこの思想、つまり明確な主題、歴史にたいする弁証法的視点、自然主義の一面性を克服した能動的なリアリズムの立場、社会主義にたいする確信、生き方とたたかいに

おける革命的楽観主義などを、この引用文から読みとってほしい、と思うのである。

つけ加えていうならば、一九七三年末から一九七四年はじめにかけて、「西欧反動」や日本反動、それらを支えるマスコミなどが一斉に「ソルジェニーツイン問題」を演出したときの「知識人」やいくつかの国の共産党のこの「問題」への対応ぶりと、反共を国是とする国の監獄で無期懲役囚としての責苦に苛まれていた金芝河の対応との鮮やかな対比にまで思いをめぐらせてほしいのである。すなわち、日本では、数多の「革新」的「知識人」たち——そのなかには、日共を乗り越えた超々々々革命家・革々々々革命家から唯の脱落・転向者、職業的反共活動家、さらには「市民民主主義」の旗手たちまでが仲よく手をつないでいた——が、光を影で覆い隠してしまおうとするマスコミ戦略の尻馬に乗ってわれ先にと反共的な発言や行動を競い合い、自主独立の日本共産党はといえば、自党がソ連と違って自由をみとめる党であるといった弁明に汗水たらしてこれ努めたのであった。

まさに、これらとは対照的に金芝河は、ソルジェニーツインの不当な攻撃からロシア社会主義革命の成果を防衛し、社会主義の光のもとで必ず矛盾は解決できるし、解決せねばならぬ、われわれ若い世代にはそれができる、とのべたのだ。

なぜ、それができるのか？ それは「抑圧された恨み」に立脚して朴ファシズム政権への反抗を貫くかれの基本姿勢が、既存の体制への実存的反抗にあるのでなく、「全民衆の悲

惨とその克服▽、または△矛盾対立とその統一および建設▽の強力な楽観主義の鼓吹、伝播」を任務とする革命の立場にあり、われわれもまた、金芝河のような革命的人間像に導かれて、社会主義の光のもとで未来社会を建設していく可能性をしっかりと見つめることができるからだ。社会主義建設上の諸矛盾を「あまりにも拡大して」光を影で覆い、「西欧反動の宣伝に加勢して」反共イデオログたる「権威」を確立したソルジェニーツインは論外としても、既存の体制に絶望しその現実を不条理として認識し秩序に反抗するだけの人間には、それができない。花田清輝の言葉をかりれば、「『反抗的人間』の特徴は、かれらの権威にたいする反抗が、じつはみずからを権威あるものにしたてあげるためのそれである点に求められる。したがって昨日までの反抗の相手が、形勢不利とみて、不意にチャホヤしはじめるや否や、あっさり反抗を中止して、すすんで相手の陣営の一員に加わるものなのである。」(『俳優修業』)日本のかつての「怒れる若者たち」が「反抗」を商品化してエスタブリッシュメントの一員となつた事実が、花田のこの指摘の正しさを立証している。また、体制の側がチャホヤしたのでなくても、一九六〇年代末の大学闘争で簇出した何万の「大学解体論者」たちがいつのまにか既成秩序のなかに安住の地をみつけたように、「反抗的人間」の限界は明らかである。かれらにとって「現実の矛盾」は「自分にとっての矛盾」でしかなく、金芝河のように「全民衆にとっての矛盾と悲惨」では、とうていありえない。既

成社会の矛盾を民衆の立場から把握しその解決の道筋をみいだしえない「反抗的人間」には、「反抗」を売りものにするか、「反抗」を自分の懐深くしまいこむか、「反抗」を重ねてどんづまりの袋小路に迷いこむかしかない。

朴ファシズム政権に反抗する金芝河の基本姿勢は、未来社会建設の革命の立場である。かれの獄中手記はこのことをわれわれに告げ知らせている。金芝河がここで垣間見せた革命的思想は、かれが処女詩集『黄土』を刊行する以前、すなわち一九七〇年以前に、すでに形成されており、このような思想に立脚することによってかれは、優れた作品を堰を切ったようにつぎつぎと創りだしたのだが、この点の解明は次節に譲るとして、ここでは、革命作家としてのかれの思想の内容を取りだしておきたいと思う。

そのためには、つづけてかれの発言に耳を傾けねばならない。

金芝河はいま朴の獄舎に幽閉され、判決なき死刑執行ともいうべき境遇におかれている。かれはなお、驚くべき強靱な精神力によって果敢な法廷闘争をたたかっているものの、その健康状態は極度に悪化しつつあると伝えられている。

金芝河は、すでに一九七四年四月二十四日、いわゆる「民青学連事件」に関連して、「大統領緊急措置第四号」によって逮捕され、約三か月後、非常普通軍法会議第一審で死刑判決をうけている。しかし、この判決を糾弾する韓国内外のた

たかいによって無期懲役に減刑され、七五年二月十五日、刑の「執行停止措置」により約十か月ぶりに出獄した。このとき、われわれの喜びは、まだ記憶に新しい。だが、かれはいままた再び、囚われた。一時出獄後、ひと月も経ぬ短時日のうちに、「反共法」違反容疑で三月十三日に再逮捕されたのだ。

金芝河は、再逮捕されるまでのひと月たらずの間に、数多くの貴重な発言をわれわれに残しているが、そのうち、われわれが日本語で接することのできるものとして出獄の翌日である二月十六日の「記者との対話」(注2)、「苦行……一九七四」(注3)、「宣言 一九七五・三・一——日本民衆への提案」(注4)などがあげられる。また、再逮捕後の発言としては、七五年五月に書かれた獄中手記「良心宣言」(注5)がある。

この節でわたしが引用するかれの発言はこの四篇の文章に納められており、それらのいずれもが一九七五年に語られ、書かれたものである。

「死によるほかに生きる道なし」、この壮絶な生き方をかれは、これからの自己の生き方として、獄中で何度も何度も確認し再確認したのに違いない。だから、「苦行……一九七四」でかれは、それまでだれも文章にすることのできなかつた「人革党でっちあげ」の事実や、拷問の実態をおそれることなく暴露しえたのであった。「苦行……一九七四」はまた、

朝鮮半島における革命運動に殉じていったひとびとの遺志をかれがひきついでたかとういう宣言でもある。取り調べの様子からはじめて、かれはつぎのように言っている。

△中央情報部第六局の奇怪な色彩の部屋(訳注 知識人専用の拷問室。昼も夜も同じ光を照らしつづけて神経を破壊する)。悪夢からさめて、まぶしい白い壁をながめたときの奇怪な感じをいつまでも感じさせるようにしつらえた陰惨でしずまりかえった色彩の部屋。どんな甘美な追憶や輝かしい希望も不可能にさせるおそろしい部屋。はるか昔、残酷な拷問で口を開いたまま死んだひからびた死体があるまま壁にかけられているような幻覚をおこさせる、身の毛もよだつ色彩の部屋。昼か夜かわからない、いつでもくすんだ電燈がともされている、同じ大きさにつくられた、なにひとつ飾りのない四角の部屋。その部屋にとじこめられたまま私たちは一〇日、一五日、そして一カ月間、すべての瞬間を身ぶるいしながら生か死かを決断していた。▽この色彩の部屋でかれは想い起こす。

△むなしくも／むなしくも死んでいった友ら／眠りにおち恥辱におおわれ 眠りにおち むなしく／殴打のもと足蹴のもと あざけりのもと むなしく／死んでいった友ら／かつては微笑うかべた／かつては声をあげて泣いた／あのすばらしかった友ら▽

朝鮮人民の解放闘争に殉じていったひとびと、そのなかには徹底した民主主義者も、共産主義者も、名もない民衆もい

ただろう。「あのすばらしかった友ら」に想いをはせながら、かれはつぎのように決意する。

△ああ もはや帰れまい 帰れまい／あの部屋で眠りにおちれば／真っ青に 真っ青に／狂い もだえなければ ぶたたびは／風吹く荒れ果てた道／わが兄弟と／旅人には二度とふたたびは▽

眠りにおちまいという決意は、「むなしくも死んでいった友ら」の遺志をひきつぎ、「狂いもだえ」ながらたたかいの道を行こうという決意を意味したのであった。

この決意をもって出獄したかれは、みずからをつぎのよう表現する。

△私は獄門を出てきた小さな血まみれの指だ。魂と肉体がともに解放されるその日をいつまでもいつまでも待っていたが、よこしまな悪魔の奸智によつてもてあそばされ、そのためにほうりだされ切り落とされた指だ。抜けがらだ。魂を失った肉体にすぎない。▽

さらにかれは、獄中に残してきた「わが心優しき『泥棒たち』、別れぎわに声をあげて泣いたベトナムで現地良民を殺した虐殺犯」をも、「私はすなわち彼らだった。彼らはすなわち私であった」というのだ。金芝河はかれらこそかれの魂であったというのだ。底辺の民衆とともに、獄中に置いてきたこの魂を解放しないではおかない、きっぱりした口調で、金芝河は「苦行……一九七四」をつぎの詩句で締め括る。

△行こう！ わが魂をとりもどしに行こう！ 行って獄門

を開きわが魂を解き放とう！ 解き放ち泣きながらひしと抱きあおう！ 一体となろう！ 統一しよう！ 統一しよう！ /わが魂に出会う日まで、わが肉体はたたかうだろう。それが棍棒の下でこなごなにくだかれ、風に散って消え去る日まで。▽

死をも辞さぬ決意を新たにした金芝河にとって、もはや朴政権の弾圧はいささかも恐れる必要がなかったのだろう。だからこそ、ひと月たらずの短い期間に、かれは、たたかいの新しい可能性と発展を展望して精力的な言論活動を展開したのだ。

「苦行……一九七四」を発表した直後の三月一日、かれは、「宣言 一九七五・三・一——日本民衆への提案」を行なう。ここでかれは、韓国民衆の勝利にとって国際的な統一戦線の存在が緊要であると直観し、それにもとづく統一行動が民族と民族の間の矛盾を解決していくであろうという見透しをのべる。かれは、一九一九年の三・一独立運動を両民族が「深い痛みと人間的自覚」をもって記憶すべき日としたうえで、日本民族と朝鮮民族との関係を、すなわち抑圧する民族と抑圧される民族との関係を、そしてその関係を打ち破り両民族がともにみずからを解放するあり方を、つぎのように定式化している。

△三六年にわたったわが韓民族に対する、あなたたち日本民族の、史上類例をみない狡猾残忍な帝国主義的侵略、

抑圧と収奪は、わが民族全体を人間以下の牛馬の境地に追いこみ、ついに地上から追放されたものの地位におとし入れたのでありますが、あなたたち日本民族はそのような非道な方法をもってわが民族を非人間化することによって、実はわが民族のみではなく、あなたたち日本民族自身をも同時に非人間化したのであります。にもかかわらず、わが民族は、わが民族だけでなく、あなたたち日本民族をも、人間化し救済しようとする運動をおこしたのであります。▽これにつづけてかれは、一九七五年の韓国は五六年前よりもいっそう狡猾な、いっそう野獣的な手口で日本民族に侵略されているといい、その実例を列挙したあとで、はっきりと日本の民衆にむかって訴える。

△私たちは、すでに民主・民族・民生の大原則を掲げ、そのような努力を絶え間なくはらってきたのであり、またあなたたちも、私たちの努力と闘争を支援するために、賢明な努力と闘争を展開してくれました。このような韓日両国民衆の、真の共同闘争こそ、私たちとあなたたちを同時に救い、同時に人間化する唯一の活路であります。▽

△民主・民族・民生運動に対する日本民衆の共同闘争のために、韓日両国民衆の反独裁共同戦線の結成を、ここに正式に提案する。▽

金芝河は、他民族を抑圧する民族はそれじしんもまた自由でありえないこと、他国の民衆を抑圧を放置している民衆もまた自由でありえないこと、したがって、両国民衆の共同闘

争こそが同時に両民衆を、結局は両民族を解放し、人間化する道であることを、われわれ日本の民衆すなわち労働者階級・人民にむけて語りかけているのだ。われわれはこの呼びかけに応えることができるか、それとも、中国人民や朝鮮民主主義人民共和国人民がそうしたように、金芝河らも日本資本主義を反面教師としながらかれらの人間化の道を進むことになるのだろうか。それを決定するのはわれわれ日本人民とその先頭部隊たらんとするものの責務にはかならない。

というのは、「他国民を抑圧している国民は、自分自身を解放することはできない。他国民の抑圧に必要とされる権力は結局のところ、自国民自身に向ってくる。」(注6)「社会革命は、先進諸国におけるブルジョワジーにたいするプロレタリアートの国内戦と、未発達の後進的な、被抑圧民族における、民族解放運動をもふくめた、いくたの民主主義的ならびに革命的な諸運動とを結合する時代としてしか、おこりえない。」(注7)というマルクスレーニン主義のテーゼに沿って日本人民が運動をつくりうるか否かが、金芝河のこの提案に依えうるかどうかとまさに同義であるからだ。この問題に関する金芝河の認識と闘争方向の提起は、マルクスレーニンゲルスやレーニンのそれと共通する内容を持っている。「反共法」によって起訴されているからといって、かれのこの革命的な思想を隠す必要はないのである。

だが、マルクスレーニンゲルスが分析の対象とした十九世紀後半のロシアポーランドの関係、レーニンが分析の対象と

した第一次世界大戦前後の帝国主義本國―植民地の関係と現在の日―韓国の関係がまったく同じ、というわけではない。

第二次世界大戦における日本帝国主義の敗北によって植民地主義の軛くびきをうちほらい、北半分で社会主義への歩みをはじめた朝鮮人民にとって、いまや資本主義日本は遅れた社会体制の国家とさえなっている。

それにくらべて、南半分ではアメリカを先頭とする国際帝国主義に後おしされた反動層が北と軍事的・経済的に拮抗すべく強権のもとに資本主義化のコースをひた走りつつある。朴軍事ファシズム政権は、国際帝国主義からの援助を糧とし、あわせて自国民の搾取・収奪によって、資本主義としての自立を可能ならしめる資本の本源的蓄積をはかるという目的に適った政治体制にほかならない。したがって、この資本主義化の進展にもなつて、韓国内には朴政権の支持基盤がつくりだされ、日本やアメリカなどの国際帝国主義は韓国労働者階級・人民の血と汗の成果を搾りとれるのだ。この過程は、日韓支配層のあいだに対立や抗争があるにしても、基本的には日米にたいする韓国支配層の同盟という大枠のなかで進行している。

第二次世界大戦後、民族独立の大波に直面した国際帝国主義は、旧植民地における革命の発展を防止するもつとも優れた反革命戦略として、同時に、狭まりゆく資本主義の世界市場を拡大し社会主義体制との闘争に打ち勝つために、旧植民地の資本主義的近代化、それによる「パートナー」化の道を

選んだ。米日帝国主義の対韓「援助」がまさにそれである。

このほか、アジアにおいてはインドネシアやフィリピンやタイなどの歩んでいる道がこれであつて、この方向は六〇年代に入つて国際帝国主義の基本戦略として確定した。そして、この新植民地戦略をはじめて、しかも決定的に打ち破つたのが、ベトナム人民を先頭とするインドシナ半島三国人民のたたかいであつた。

ところで、朝鮮半島ではいま、相互に発展の不均等性をはらむ米日韓の、対立しつつ連携する支配層どものインタレストと、いまはまだ強固な同盟を築いてはいないが運動のなかでやがては巨大な団結した姿を現わしてくるであろう北の国家と人民、南の人民、日本の労働者階級・人民の共通したインタレストとが、激突し鎗を削っている。このような関係において、マルクスレーニン主義のテーゼが、韓国民衆を代表する金芝河の日本帝国主義批判・日本人民批判によって内容を豊富にされ、いま一度われわれにつきつけられているのである。三月一日の、われわれにむけた金芝河の「宣言」は、このように、本質的な内容をもつた重要な呼びかけであつた。

いまわれわれは、刑の執行停止による仮出獄後二週間たらずの間の金芝河の二つの発言をみてきた。この二つの発言や、二月二十一日の「民主回復拘束者協議会」の結成や「民主回復国民会議」への参加などの活動は、たちまち金芝河を否応なく政治闘争の前衛部へと押しあげた。このような活動があ

つたればこそ、投獄され死刑をもって嚇されてもそのたびにますます戦闘の炬火を赤々と全民衆の頭上にかかげてやまぬ不屈の詩人を、今度こそ確実に殺そうと、朴政権は、「反共法」という切り札をもって、逮捕したのだ。なぜか。朴政権にとって、一九七〇年以降の金芝河の文学者としての芸術活動は、一般の「芸術」の範囲をこえて政権の土台を揺るがす物質力となって迫っていたからである。

わたしがいま、物質力と表現したもの、それは、韓国社会における矛盾の正確な認識にたつたたかしの必要と方向を民衆に伝え、その魂をゆさぶり、たたかう勇気を鼓舞するかれの「詩」であり、「戯曲」であり、「論文・発言」である。

かれは、文学を武器として韓国支配層とたたかう。かれの作品が芸術として優れていればいるほど、かれの作品の一つひとつが支配層の腐敗した肉体をより深くつき刺すのだ。かれの作品のほとんどがそのような政治的効果を計算してつくられていることは、いまさらわたしが喋々するまでもないかもしれない。一九七〇年以降の金芝河にとって、発表された作品を通してみるかぎり、政治的行動と芸術的創作活動の間に背反はなかったようにみえる。しかし、この点について金芝河は、七四年の獄中体験をとおして、はじめて決定的な回答を得たのだという。すなわち、仮出獄翌日の、「記者との対話」で、かれは次のように語っている。

△質問——金芝河さんが行なわれている活動は、文学者としての活動なのか、政治的な活動なのか、その点を。

答——まず、今度監獄の中で政治的想像力に関して、私は一つの論文を構想しました。

政治的行動と芸術的創作の間のギャップをどう埋めるかは、私、金芝河にとっては第一の宿題であったわけです。獄中で苦しみながら、私は、この二つの間の相関関係について一つのヒントを得たように思います。人間の生に関するこの回答をうるための努力は何も私一人に限られたものではなく、いわゆる第三世界とよばれる社会の人たちにとつても同様であると思うのですが、これは「飢えた子供の前で文学が何の必要があるか」と問いかけたサルトルの質問に対して、第三世界はどう答えるべきか、という問題に関連することでもあります。

私はこれに対して決定的な回答を得たように思います。監獄が私を助けた。

この点で私は、朴正熙氏に感謝します。一人の学生は死刑の判決を受け「光栄です」と答えました。これは一体どういう意味であるのか。そこから政治的想像力という問題を考え始めました。

死が何故、栄光になりうるか、それはキリストの話ではない。マランマカリカ（無神論者のためのエッセイ？）の話でもない。

これは所謂、東風の話であります。結論を話すならば、政治はいまや第三世界の全ての被圧迫民衆自身の呼吸であります。特に長い歴史を通して、類例のない残酷な圧迫を受け

てきた韓国人にとってはこの問題は大変重要であります。

政治はわが民族の未来にとって集団的想像力が発揮されなければならぬ核心的問題であります。そして、これは死との対面、革命、個人の完成、即ち生と世界の同時的改革の問題でもあります。

私にとって政治と芸術は折衷ではなく、始めから同じ問題であります。これが即ち死刑を宣告された時、私と全ての学生たちが栄光と答えた理由であります。

二つが一つである。いまや、あの二つの問題のギャップが統一されました。

難しかったが今やっと私の足で立ったような気がして嬉しいのです。

私は、わが民族全体の未来の問題と私個人の未来が一致していることを感ずることができません。▽

かれは、政治的行動と芸術的創作の間にあったギャップを獄中の体験によって埋めることができたと言ふ。この体験とは、死刑の判決を「光栄」と受けとめた集団の存在であった。かれらは、個人の生き方を、抑圧された民族の解放闘争の一部にしっかりと位置づけたからこそ、死の恐怖をのりこえることができたのだ。金芝河は「苦行……一九七四」で、この体験を「芸術的な感動の極致」であったともいつている。かれは、革命の観点にたつて、政治と芸術が同一のものであると心底から納得したのであった。

金芝河は、「政治はいまや第三世界の全ての被圧迫民衆自

身の呼吸であり、……」 「政治はわが民族の未来にとって集団的想像力が発揮されねばならない核心的問題である」といつたのだが、政治と芸術を二元論的に対立させるのではなく、芸術を革命の芸術として甦らせねばならぬのは、なにも抑圧された「第三世界」諸国民衆だけではない。資本主義社会にあって、一瞬でも資本との闘争を放棄すればたちまち非人間的な境遇に追いやられてしまう労働者階級にとつても、政治を「階級自身の呼吸」としななければならないのは自明の理である。むしろ、ブルジョワ・イデオロギーの鼓吹によって階級としての覚醒が妨げられ、階級としての意識が日々解体させられているところでは、被抑圧民族内部に比してなおいつそう自覚的に、労働者階級全体の未来を表現する「集団的想像力」の発揮が必要とされるのである。金芝河らが、政治を抜きにして芸術活動を行ないえないのは、悲しむべきことではなく、変革を志向する芸術家にとつて模範とも、励ましともせねばならぬものである。(注8)

われわれは、このような意味で、かれの発言から強烈な生きた教訓をひきだすことができよう。と同時に、忘れてならないのは、「私にとって政治と芸術は折衷ではなく、始めから同じ問題でもあります」というこの一言が、屈服や逃避や観照の生き方を拒否し、それらの生き方に照応する創作上の態度、つまり抒情への逃避やディレッタントイズムや解釈主義や追従的な態度——これらのすべてをきっぱりと排して、リアリズムに立脚した抵抗の文学、変革の文学を追求してき

たかれの血の滲むような苦闘を背景にしてはじめて、発せられたものだということである。この苦闘のプロセスについては次節でふれよう。

ここまででわたしは、「苦行……一九七四」からは金芝河の豊かな人間性と、民族と民衆に自己を一致させ死をも恐れずたたかう決意とを、「宣言 一九七五・三・一」からは民族をこえた民衆間の連帯闘争の思想を、「記者との対話」からは政治と芸術の統一に関する見解をとりだして紹介し、あわせてわたしのコメントを付して、革命作家としてのかれの姿を描きだそうと試みた。わたしが紹介したまさにこれらの発言が、かれが再逮捕される理由であったのだ。われわれは、この再逮捕後一年半以上もの期間がたっても、かれを獄中から救いだせぬ痛みをもって、かれの発言にもう少し耳を傾けなければならぬ。

この発言は、「良心宣言」と題して、再逮捕後の獄中から発せられた。

「良心宣言」は、かれを共産主義者にしたて「反共法」によって葬りさるうとする韓国情報部(KCIA)の陰謀を暴露し、反論するための駁論の形式をとっている。したがって、この「宣言」はかれの思想を総括的に表現したものとなっているのだが、ここでは戦闘的な駁論であるこの「宣言」を貫く底流となっている、民衆への深い愛と、民衆の革命的エネルギーへの信頼、革命と民主主義への渴望をとりだして

みよう。かれは書いている。

△私は、隣人を、抑圧され搾取され、苦しみと蔑みのなかで人間としてのあらゆるものを奪われている具体的な人たちを、からだ全体で、熱く実践的に愛する人間となることを願っている。これが、自らに課した、私の人間的な課題のすべてである。これが私のあらゆる思想的模索の出発点であり同時に帰着点である。▽

△私が体験した民衆の姿は、正直で、勤勉で、愚かに見えて豊かな天の知恵を備えており、力なく無気力に見えながら、実は偉大な力と強い意志を秘め、粗野ではあるが隣人にたいして人間らしい温かい愛情をもった、堂々と誇り高く、たぎる力にみちた姿である。▽

このような民衆観に立って、かれは次のように宣言する。
△私は自分の兄弟たちを愛するがゆえに、彼らを非人間化している地上のすべての抑圧と収奪を憎悪する。それは抑圧される者ばかりでなく、抑圧する者すらも徹底的に非人間化するものだ。このゆえにこそ、抑圧と収奪に抗してたたかうこと——これが私の思想的、実践的関心のすべてである。▽

これらの引用からも、かれを民族詩人とのみ呼んでいては、かれの思想を正しく掴みえないことが了解されよう。

先に紹介した「宣言 一九七五・三・一」からも知りえたように、かれにとって民族の解放とは、つまり革命とは、民衆の抑圧と収奪からの解放であり、人間が非人間化されてい

る状態からの脱却である。かれの思想の射程距離は、民族内部の抑圧・被抑圧関係の打破を貫いて、もっと深い。いわばそれは、民族と民族との抑圧・被抑圧関係、ひいては「地上のすべての抑圧と収奪」の消滅を通して奪われた人倫をとりもどす、ロング・レンジの思想なのである。

マルクス主義者の「思想的、実践的関心のすべて」もまた、金芝河のそれと同一である。ただ、マルクス主義者は、金芝河が革命的エネルギーをみいだしている民衆の中核をなすものが労働者階級であり、「地上のすべての抑圧と収奪」を消滅させ、人間の非人間化に終止符をうつ社会こそが共産主義社会であること、そしてその無階級社会に到達するためにはどうしても通らねばならぬ関門としてプロレタリア独裁の過渡段階があることを、隠さず主張する。そして、労働者階級こそが、資本家階級との日常の闘争をおして「粗野ではあるが隣人にたいして人間らしい温かい愛情をもった、堂々と誇り高く、たぎる力」をきたえ、そのうえに、かたく団結する力と、永い階級闘争に勝ちぬいて、すべての抑圧された階級に解放と人間化をもたらす革命的規律の力を獲得していくのである。金芝河の作品には、このような民衆像はいまだ登場していない。そしてそこに、こんにちの韓国の客観的条件が反映しているのである。

金芝河はまた、自己を被抑圧民族の一員として規定しているが、このときかれにとって民族という概念は、民族そのものとして、あるいは他の民族との区別という相対的一面的な

内容で理解されているのではない。かれは、この「宣言」のなかで、民族という単語を四回使っているが、それらを使われた文脈のなかでとらえてみれば、かれが民族という概念を民族内部の矛盾を把握したうえで使っていることが明瞭となる。すなわち、「私は永くうけつがれてきたわが民族の伝統を愛し、そこに限りのない民族的誇りを感じる」、「わが民族特有の革命的伝統を継承発展……」、「わが民族の永い強靱な民衆運動への愛着……」というように、民族を形成する民衆その民衆の革命的伝統、かれらが足場を築くべき、引きつぐべき革命の歴史を表現する文脈において、そのすべてが使われているのである。われわれは、帝国主義下の日本民族のうちにさえ、勤労（＝被搾取）大衆によって営まれる生活には、革命的といまはいえなくても、民主主義的なさらには社会主義的な民族伝統の要素が生みだされ蓄えられてきているといえるであろう。しかし同時に、日本民族のうちには、「要素」としてではなく「支配的な形」で、ブルジョワ的な、革命的な伝統が形成されてきている、と付け加えねばならない。金芝河の方法にならって、「民族」という言葉が対立を含んだ概念であるとして、それを日本民族にあてはめれば、このような分析に導かれる。それはすぐれてマルクス主義的な分析といえよう。

民族を、その内容である民衆を媒介にして理解し、そこに歴史発展の原動力をみる視点に立つならば、あらゆる反動的な民族主義、エセ民主主義はたちまちその仮面をひきはがさ

れざるをえない。鋭くも、かれはこのことをつぎのように指摘する。

△民衆を信頼することができず、抑圧者の注入した倒錯した価値感をもつ者は、一貫した民主主義者となりえず、終局には圧制の側に立つようになるだろう。▽

かれはまた、革命によって建設されるべき新しい社会を旧約聖書にあるカナンの地にたとえながら、民衆のひとりとしてたたかう革命作家としての任務をつぎのように規定している。

△私は、カナンの地がどのようなものか、正確に描くことはできない。それは、一人の個人によって描かれるものではなく、民衆の手によって創造されるべき性質のものである。民衆が自らの手に、自らの運命の鍵を握りしめることができるようたたかうこと——そこまでが私の課題である。▽

わたしはこの節で、一九七五年はじめの金芝河のいくつかの発言を紹介し、革命作家としてのかれの相貌を浮き彫りにしようとした。だが、わたしの試みは金芝河の思想の表面のしかもごく一部をなぞっただけであったかもしれない。しかしわたしにとって、かれのラジカルな思想を確認するには、それは十分すぎるものであった。とはいえ、なかには現代におけるもっとも革命的でかつ科学的な思想体系であるマルクス主義をひっぱりだして、かれの思想の限界を喋々するむき

もあるかもしれない。たしかにかれは、マルクス主義の出発点ともいべき宗教批判と、革命の主体たるべき近代プロレタリアートの発見の両方を、いまだなしえていない。にもかかわらず、金芝河のアクチュアルな問題意識、対象を分析する弁証法的な手法、民衆の革命的エネルギーにたいする無限の信頼、そしてなによりもあふれるような革命的情熱は、唄を忘れたカナリヤよろしく革命的精神とヒューマニズムを失った自称「マルクス主義者」や「科学的共産主義者」の横行する日本において活動しようとするわれわれに、示唆に富んだ教訓を与えずにはおかない。

かれは、かれの全存在を抑圧された民衆の解放のために捧げ、すべての営為をそこから出発させる。かれの一言一行が朴政権にとっては鋭い棘となり、かれとともにたたかおうとするものにとっては、何物にもかえがたい励ましとなる。かれは、生き方においても、創作活動においてもみごとに革命的精神を貫いている。かれが体現しているもの、それはまさしく現代における革命的人間像の典型といわねばならない。

いかに生き、いかに書くか

わたしが前節で紹介したような革命的思想を、金芝河は、どのようにして形づくってきたのか？ この間に答えるかれの作品が、一九七〇年に発表された二つの評論「諷刺か自殺か」と「民族のうた、民衆のうた」である、とわたしは思う。

わたしはこの節で、とくに「諷刺か自殺か」をとりあげ、この評論が書かれる以前のかれの十数篇の短詩をも合わせて検討することによって、かれの思想と創作方法確立の過程を辿りたいと思う。

評論「諷刺か自殺か」(注8)は、韓国の月刊詩誌『詩人』一九七〇年六・七月号に発表された、金芝河のはじめての評論である。「故金洙暎追悼詩論」と副題されたこの評論は、つぎのように書きだされている。

△ 妹よ、

諷刺か、さもなければ自殺だ。

これは金洙暎の詩の一節である。この詩句のなかに含まれているジレンマ、諷刺と自殺という二つの和解がたい極端な行動の相互衝突と相互連関は、今日この韓国に生きている若い詩人たちにとって、かれらの現実認識とかれらの詩的行動における重要な要ともいうべき問題のひとつとなっている。▽

この現状認識につづけて金芝河は、ジレンマに陥っている韓国の若い詩人にむけて、朴軍事独裁政権という「物神の暴力」のもとで、詩がいったん完全に敗北したかにみえるこのときこそ、「詩の敗北を物神の暴力に対する創造的精神と詩の勝利にとりかえることのできる機会でもあるのだ」と呼びかける。かれはつづけていう。物神の暴力が詩人の意識のなかで悲哀の感情として凝結するこの時代にはまた、「詩人が魂の生を殺し、肉体の生を選ぶか(つまり屈服ないし逃避)、

さもなければ汚れた肉体の生を殺して清らかな魂の生を選ぶか(つまり自殺)、あるいは肉体と魂が同時に生きうるならかの熾烈な抵抗の生の形態を選ぶかの決断が迫られている」と。

このような決断を迫られている韓国の若い詩人が、あらゆる苦難に耐えて断固第三の道を選択し、そのうえでいかに詩をかくべきか、これが評論「諷刺か自殺か」のモチーフである。

自分じしんにたいしても向けたこの問いに答えて金芝河は、詩人は、諷刺という詩的暴力の表現形式を採用し、この詩的暴力をいまは主として特殊集団の許しがたい悪徳へ向けるべしとの結論をみちびきだした。このような主張を展開する過程で、詩によるたたかひの戦略・戦術をのべたのがこの評論である。

わたしは、「詩論」として紹介されるこの評論が、単に詩の技法を論ずるにとどまらず、矛盾にみちた階級社会のなかでいかに革命的に生きるべきかをかれが確立した文章であると思う。そしてそれは、ヴラジミール・マヤコフスキーの評論「いかに詩をつくるか」(注9)がそうであるのと、相似する状況のもとで成立してきたのである。

二人の評論は、モチーフが共通しているだけでなく、それぞれの評論において素材とされている詩と、その詩の作者の傾向までもがよく似ている。

「諷刺か自殺か」で金芝河が克服すべき対象として選んだ詩

人金洙暎は、一九二一年に生まれ、金芝河がこの評論を発表する二年前の六八年、四七歳で交通事故死している。金洙暎は、朴政権が推進する皮相な近代化のもとで呻吟する韓国民衆の悲哀をうたう抵抗詩人であった。かれの代表作のひとつである「巨大な根」は、朴独裁政権を痛烈に批判するばかりでなく、それに対置して、近代化によって破壊される朝鮮民衆の古い因習的な伝統的生活様式を懐しんだ詩であり、これが資本主義的近代化に抵抗するかれの基本的姿勢であった。

一方「いかに詩をつくるか」で例に引かれ、マヤコフスキーに批判されたセルゲイ・エセーニンは、「わらじばきで十字架の刺しゅうのあるルバーシカをきて」いたが、マヤコフスキーの言葉をかりれば、かれは「観念的な田舎者」であった。「ほんものの純朴な百姓たちがどんなによろこんで自分の衣服を長靴と背広にきかえるかを知っていた」マヤコフスキーは、エセーニンのそのような態度が長つづきするとは思っていなかった。十月革命によるツァーからの解放を喜びながらも、プロレタリア革命の意義を理解できぬとまどいを「観念的な田舎者」の振舞いによって表わすエセーニンにたいして、マヤコフスキーは辛辣な批判によって詩作品に現われるかれの良さを引きだそうと努めたのであったが、いずれにせよ、エセーニンもまた社会主義革命によって発展する新社会にたいして、古いロシアへの郷愁を憂鬱な思いをこめてうたう詩人であった。

民族の古い伝統への郷愁をうたう金洙暎とエセーニンのそ

れぞれの作品が同時代のひとびとに及ぼす影響とたたかうこと、これが金芝河とマヤコフスキーの共通した発想であった。マヤコフスキーは、エセーニンが革命に嫌悪感をもつイマジズムの詩人たちのグループを脱してヴァップ（全ロシア・プロレタリア作家協会）へ向った進歩を、さらには、マヤコフスキーたちレフ派（ロシア未来派によって結成された文学団体「芸術左翼戦線」）によせたシンパシーを、歓びをもって受けとめていた。だが、「革命や階級と有機的に結びつき、目前に大きな楽天的な進路をみいだしているような詩人のすべてにある種の嫉妬の念を抱いていた」「自尊心の強い」エセーニンは、酒臭い退廃からぬけだせず、つい一九二五年に自殺してしまったのである。友人の死はマヤコフスキーを悲しませた。だがマヤコフスキーの悲しみは、翌朝の各新聞にエセーニンのつぎの二行の詩句が発表されるや、この詩とたたかう決意へと変ったのだった。

この世で死ぬのはめずらしくない
だが生きるのもかくべつめずらしくない……

マヤコフスキーは書いている。

△この力強い詩が、ほかでもないこの詩が、多数の動揺分子を首吊縄や連発銃へ誘きよせるであらうということがそくぎに明らかであった。いかなる新聞の解説も、いかなる新聞の論説もこの詩を無効にしえないであらう。

この詩とたたかうことができるのは、たたかわなければならぬのは、詩だ、ただ詩だけである。▽

マヤコフスキーは、このような創作意図のもとに、「セルゲイ・エセーニンに捧ぐ」を書いた。マヤコフスキーじしんの言葉によれば「この詩は、発表に際して雑誌も出版社も採す必要はなかった。この作品は印刷されるまえから書き写され、こっそり植字台から盗みだされて、地方新聞に発表された。朗読を講堂そのものが要求し、朗読後には、人びとはこぶしをにぎり、廊下では憤慨するものもあれば絶賛するものもあり、出版された日には、悪罵と讃辞の書評が同時にあらわれ」という大反響をまきおこした。この詩の最後の二行は、つぎのように締め括られていた。

この人生で死ぬのはむずかしくない。
人生をつくるのははるかにむずかしい。

「人生をつくる」、すなわち、革命的に生きる道はいかにあるべきなのか？ 「社会のなかには、詩作品によってしか解決の考えられない問題がある」と確信し、「もつともすぐれた詩作品とは、プロレタリアートの勝利を目的とするコミンテルンの社会的註文に応じて書かれた作品であり、新しい表現力に富む、万人に理解される言葉で書かれた詩」であるとの認識に立つマヤコフスキーにとって、「人生をつくる」とは、革命の要請に応じて書く詩人として革命に参加し、プロ

レタリアートを勝利へと導く仕事を行なうことにほかならなかった。かれは、このことを、詩人としてのかれの活動のなかに貫いたのであった。

金洙暎の「妹よ、／諷刺か、さもなければ自殺だ。」という二行の詩句のなかに、現実の矛盾に気づきながらそれとたたかうすべを知らず、身もだえし、葛藤とジレンマに陥っている自分じしんをもふくむ韓国の若い詩人の姿をみた金芝河にとって、「いかに人生をつくるか」は切実な問題であったに違いない。「諷刺か自殺か」において、自殺でなく、ましてや屈服や逃避などでもなく、肉体と魂を同時に生かす熾烈な抵抗の生の形態として「諷刺」という詩的暴力の表現形式を選びとり、その暴力を「特殊集団の悪徳」に加えることを決意してからの金芝河の創作活動は、朴政権にとっては恐怖の的となり、民主化を求める韓国の人民大衆にとっては、たまたかいの導きとなったのであった。

マヤコフスキーのようにコミニズムにしっかり立脚しているのではないといえ、「いかに人生をつくるか」という問いへの金芝河の答えも、もうひとつの革命的創作方法と生き方を宣言するものであった。わたしが前節の冒頭で引用した「ソルジェニーツィンと私」のなかで金芝河がとっているソルジェニーツィン批判の論法と、その弁証法的な論法を駆使してかれが語っている内容の両面は、「諷刺か自殺か」における金洙暎批判のなかで、すでに原型が形づくられていたのである。といっても、金洙暎の文学がソルジェニーツィンや

エセーニンと同一であるというのではない。金洙暎は資本主義的近代化の過程における支配階級の人民収奪、抑圧に反対したのであって、金芝河は、反対のしかたにおける金洙暎の文学と思想の限界をこの評論で批判し、克服したのだった。

この批判は実を結んだ。

「諷刺か自殺か」で明らかとした手法を駆使して書いた長詩「五賊」をひっさげて、一九七〇年、奔馬のように韓国文壇に登場した金芝河は、堰を切ったように反独裁の優れた作品をつぎつぎと発表しはじめた。「五賊」につづけて六月には戯曲「ナポレオン・コニャック」と「銅の李舜臣」を、つづけて評論「諷刺か自殺か」を発表し、十一月には「抗日民族学校」で評論「民族のうた、民衆のうた」を講義し、十二月には処女詩集『黄土』を発売している。しかもこれらは、「五賊」発表後「反共法」違反の口実によって一か月にわたる拘禁をうけ、それがもとで肺結核の再発をみるというハンディキャップをおしての創作活動であった。「ソウル大学韓日屈辱会談反対学生総連合会」のリーダーとしてたたかい、敗れ、敗北の屈辱を胸に秘めたまま大学を卒業した一九六五年から一九六九年までの金芝河と、一九七〇年の金芝河は、瞠目すべき変貌とみえるほどである。一九七〇年は、韓国文壇にとって特別な年であるばかりでなく、金芝河そのひとにとって、いわば、回生のときであった。

「諷刺か自殺か」は、金芝河のこの転換点に位置する作品である。この評論をはじめ、一九七〇年にかれが示す精神的

高揚、創作意欲の充溢は、しかし、けっして何の前ぶれもなく、突如としてかれの身に起ったのではない。それは、一九五九年ソウル大学文理学部美学科に入学後、青春のありったけを投入した詩作と政治闘争の両方に敗れたかれが、それらの敗北と敗北感からくる挫折の感情とともに打ち勝とうと、それらと必死に格闘し、苦悶し、肺結核に肉体を蝕まれ、文字どおり血を吐きながら、みずからを革命家へと育てあげるたたかひの勝利の開花だったのだ。

ところで、この勝利した苦闘の精神史を凝縮した作品「諷刺か自殺か」を、よりよく理解するためには、この作品に至りつくまでのかれの内面的な闘争の跡をみておく必要がある。

一九六一年から一九六九年にいたるこの八、九年間の、金芝河の精神内部における闘争を映しだしている作品は、詩集『黄土』に収録されている。だが、いっそう明瞭にこの時期の金芝河の葛藤とそこからの脱出過程を映しだしているのは、『黄土』に収められることのなかった二十数篇の作品群である(注10)。これらは、一九六〇年の四・一九革命の高揚、翌年五月十六日の朴正熙らの軍事クーデターによる反動、六三年からはじまる軍政反対・韓日会談反対闘争の高まりとその敗北、七〇年にむかう暗い日々のそのときどきに書かれた作品である。

ここで急ぎ足にはあるが、これらをとおして、かれの内

的变化の過程をみておこう。

六一年の軍事クーデターによって指名手配され、地下にもぐらざるをえなかった時期の屈折した怒りを、かれは「山亭里日記」で、「私を／ここに縛りつけるものはなにか／灼けつく陽光の下 白く光るのみ／よどみ流れぬ池に深く潜み／あくまで私をここに縛りつけるものはなにか」と書いている。「星の光すら見えない夜」では、敗北からたちなおろうとするかれらが「なにひとつない／笹の葉一枚そよがせる風すらない／これほどまでに空しく／これほどまでに乾ききつていて／狂おしいばかりの 狂おしいばかりの／たがいにいさかわずにはいられない／あの灯の消えた部屋のしょぼくれた酒盛り しょぼくれた友ら」という状況におかれていた。

六五年韓日会談反対闘争における再度の敗北は、金芝河に深い心理的痛手を与えた。「雨降る夜」の一節は、ソウルから逃亡するかれの確信のない不安な心境を「泣いてくれ／蛙よ 私のために思いきり泣いて／雲低く流れる あのはるかな峠をまたも越えて／みはるかす野を 果てもなくさまよい行く私を 狂おしく泣いてくれ」と伝えている。

六五年の敗北は、金芝河たちにとって、政治闘争における敗北というにとどまらず、生活における敗北でもあった。そこには敗北の詩が生まれた。「たそがれが降りしき／両手を後手に組み／真っ赤な唇がほの白くほほ笑む裏通り／行こう 釜山楼へ／ヒヒヒと笑いながらいじくりに行こう／蝶たちがひそやかに坐るとき／白粉の匂い ふと鼻をかすめるとき／

私はすでにすっ裸だった／揉み 脱がし わめき 吸い 舐め／私は膿のつがれた／盃いっぱい「裏通りのどぶ鴉ケ原」と退廃の生活をうたつてみせるはかばかかった。また、閉塞状況を打ち破れない鬱屈した中途半端なもどかしさを「なにもできない／明け方二時だ／中途半端な時間だ／まるで この時代そのままだ」(「明け方二時」と表現し、どうにもならない生活と闘争のしがらみを「ひもにしがみつぎ／ひもをつかんで操るがままに／……／朝から晩まで 晩から朝まで／おいらは おいらは ただのあやつり人形さ」(「あやつり人形」と自嘲するのだった。

だが一方、このような日常のなかでも、朝鮮戦争当時、米韓連合軍に抵抗したパルチザン闘争の根拠地として有名な智異山リサンに対峙すれば、「雪におおわれた山を見れば／血がたざりたつ／青い あ竹藪を見れば／怒りが火と燃ゆる／あの竹の下に／あの山の下に／いまも流れる赤い血」(「智里山」と叫ばずにはいられなかったのであった。

軍事政権下の息づまるような韓国社会、しかし、その息づまりは、たたかう意志をすてず、かといって具体的で有効なたたかう方法を手にしていない不安定な状態から生まれてきたのだ。革命と抵抗の詩作の道をすてさえすれば、ファシズム社会のなかで生きていくことはおろか、ディレッタントイズムの文学、逃避の文学をひさいで、それを盛大な生活の糧にさえできたはずである。しかしこのような生き方は、「魂の生を殺し、肉体の生を選ぶ」立場であり、ブルジョワ社会

にのみこまれてゆくものにほかならない。金芝河は、この生き方を峻拒したのである。

解放への夢は、やがて、疲れた体と心を洗い、回復への兆をみせはじめた。「なんと珍しいことだろう／汚ない小川の水が サラサラサラ／ああ 遠い遠い海に行こう／なんとしても行こう 休むことなく／夢だけは 澄みきったところに 疲れたのは私は立っている」「水流れるところに」。そして、きょうこそは無為の生への未練を断ち切ろうとする心の動きを表わし始める。「未練の機はたを／断ち切り／見知らぬ街に 遠い野に／痛みあの虚空に 今日旅立ち行こう／刀よ／毅いい にしえの師よ」「刀よ」と。こうして、「風あらしき日」では、遊廊に身を沈める自分じしんと仲間たちに退廃の清算を呼びかけるようになる。「二月の西風に／梅の花咲けば／べらべらと口先ばかりの／下のほうに 火をまくんだ 種をまくんだと 右往左往し／青楼紅楼 イサラリに／入りびたりの野郎は出てこい」と。

しだいにかれは、みずからの不決断への訣別を準備する。「本(あるいは『金洙暎伝』)」では、「来世は本のなかにある／だから雄壮なんだよ／おれは現世すら知っちゃいない／だが本よ／反省しろ 本よ／どうしてお前には声がないんだ」と、反乱することのない沈黙する真理を嘲り笑う。嘲りながらかれは、過去の牧歌への郷愁や、解釈するだけの観照の立場や、屈服や逃避の文学と訣別し、変革の文学へとすすんでゆくのである。

退廃に身を沈め、あるときは不安と焦慮にかられ、それでもなお解放への夢を追求しつづけたかれは、民衆の革命的伝統と現代の抵抗芸術の存在に助けられ、方向を示唆され、自覚的にそれと結びつく努力のすえに、死を覚悟することによってしか生きる道はないと、あらゆる「未練の機」を断ち切り勝利の確信をわがものとするにいたる。「早瀬(一)」「早瀬(二)」や「ソウル」(注1)はそのような決意をうたった作品である。

「明日は出で発ち／出で発ち 果てもなく私も早瀬にそって／死によるほかには／絶対に みずから死によるほかには／生きる道なし 行こう メゴルモルに行こう」(「早瀬(一)」)。「最後に残されたただ一度は刃の上に／ああ刃の上に／花のように赤く赤く散るのみ／うちかつために／死んでお前にあくまでもうちかつために／死んで血でもってお前の刃を錆びさせるために」(「ソウル」)。

「死によるほかには生きる道なし」という決意は、創作方法における革命と相互に緊密に結びついたものであった。一九六九年の作である「太陽は人の」では、あるときは竜巻のような、あるときは岩をも削る水の流れのような民衆の闘いの最終的な勝利を信じる、確信にみちた金芝河の語り口が生みだされる。それは次のような力強い詩句をもって書きだされている。

「太陽なんて／人の足ほどの広さしか持つちゃいなかったよ／だれ一人 やって来る／やって来る ああ竜巻きを知り

やすまい／野原じゃ　しかし／草の葉すら風にゆらゆら舞ったことを／ときには風は山さえ動かしたことを／片時もざわめかぬ波がないように／古い刀はやがて刃がこぼれたさ　知っているか／風がたえず吹き渡り　音をたてても知りやすまい」。

いま紹介した十五篇の作品からも窺えるように、金芝河は、一九六〇年代の苦しいたたかひの過程で、生きる道として「肉体と魂が同時に生きうるなんらかの熾烈な抵抗の生の形態」を選び、民衆の革命的エネルギーへの限りない信頼に依拠した諷刺詩という表現形式にたどりついたのである。

金芝河にとって、詩の分野における革命的な創作方法にたどりつく過程は、ソウル大学在学中に影響を受けたドイツ表現主義からの脱却の過程でもあった。この過程はまた、かつてかれが研究し、その影響を受けたと思われるダダイズムや超現実主義の表現形式などの止揚の過程でもあった、と推定される(注12)。一九六三年に発表された「夕暮の物語」や、この時期に書かれたと思われる『黄土』所収の幾篇かには、実際に、表現主義の影響をみることができる。また、後にかれが発表した作品のいくつかをとおして、未来主義や表現主義や超現実主義の殻を打ちやぶり、民衆の立場にたつ革命作家と呼ばれる作家たちの作品との類似(ないし影響)が感じられるのも、理由のないことではないとわたしは思う(注13)。このことをもう少し詳しくみるためには、一九七〇年のエ

ッセイ「諷刺か自殺か」が金芝河にとって「いかに生きるべきか」を確立したという側面だけでなく、「いかに書くべきか」を確立した文章でもあったという側面にふれなければならぬ。生き方を支えるものは、たたかひの戦略と戦術をしっかりと掴むことであり、それへの確信がまた生きる信念となるからだ。

「いかに詩をかくか」、一般的なこの命題を金芝河は、軍事独裁政権のもとでの韓国社会でいかに詩をかくか、という限定した意味でみずから問い返す。こうしてかれは、物神の暴力によって詩人の内部に凝結される悲哀、悲哀の無限の集合である「恨(ハン)」を、詩人の内部で逆に詩的暴力の形態、すなわち諷刺に転化し、そのうえで大衆の革命的エネルギーに立脚し、いまは主として「自己と大衆を抑圧するなんらかの暴力集団の悪徳にたいする否定と暴露と告発」のためにこの諷刺という詩的暴力を動員せねばならないというテーゼを提出するのである。「いまは主として」というこの限定は、自己と大衆を抑圧する韓国社会の諸悪の根源が朴政権とそれに結びつく内外の支配層にいまはあるという認識にかれが立っていることを示している。金芝河の認識は、明白に、「反ファシズム闘争の文学」を貫くところにあり、この立場に立っていまは詩をかくか、とかかれは韓国の若い詩人に呼びかける。この立場はまた、社会の発展段階、換言すれば、進捗しつつある革命の発展段階を正確に把握し、その認識から導きだされる革命の要請に詩人として応える立場である。

一方、このような立場にたつて、かれはどのような表現形式を採用したか。かれは詩的暴力を、喜劇的表現のなかに位置づけて、つぎのようにのべる。

△若い詩人たちはどのような詩的暴力の表現を悲哀と暴力のもつともすぐれた統一として選ぶことができるであろうか。それは暗黒詩なのか。否。暗黒詩は悲哀を強い暴力へと誘導する触媒ではあるが、一定の弱点を持っており揶揄と悪口にみちた大衆の内的・潜在的な暴力の詩的形象化においては無力である。それは超現実主義へと傾く危険が多い。しからば恐怖詩なのか。否。恐怖詩は日常性にたいし衝撃を加えることによって、固定化しようとする体制内意識を攪乱することはできるが、散発的な情緒的表現をひとつの方向へと集中させることはできないし、そのため否定的エネルギーを弱化、分散させる可能性がより大きい。それは表現主義、ダダ、即物主義へと傾く危険性が多い。であるならば暗黒詩、恐怖詩のような悲劇的表現は、抵抗詩としては不合格品なのか。否。それは特殊な効果をもっている。▽

△ひとえに熾烈な悲哀と、澱りとして沈んだ恨（ハン）を土台にして悲劇的表現を吸収する一方、諧謔を広範囲に組み合わせながらも強力な諷刺を主たる核心とする高揚した喜劇的表現のみが、あらたな暴力表現の唯一の可能性である。▽

△正しい諷刺とは暴力表現の方法と方向が矛盾なく統一さ

れたものでなければならぬ。不斷に変化し、あるいはなかなか変化しない大衆の悲哀および欲求体系に、大衆の不満の爆発の方向に合致した発想の体系および攻撃の方向を正しく決定したものでなければならぬ。それは大衆にたいする表現においては諧謔を中心にし、諷刺を副次的・部分的なものとして組み合わせることであり、大衆の対立物にたいする表現においては諷刺を前面に核心におしだし、諧謔をごく特殊な部分に局限し、附随的に独得に組み合わせるものでなければならぬ。▽

この二、三の短い引用文から、金芝河のいう「詩的暴力」つまり文学（芸術）が社会変革の物質力をもつことへの、かれの確信を読みとりうるであろう。したがって、文学（芸術）のもつ社会変革の物質力を作者が正しい方向にむけなければ、作品のもつ力によって大衆を現実の諸矛盾から逃避させたり、逆に大衆のなかに存在する散発的なエネルギーを誤った方向に組織したり、エネルギーそのものを弱化させうる、とかれは主張するのである。この認識にもとづいてかれが選んだ表現形式、それが諷刺であり、悲劇的表現を吸収した喜劇的表現であった。これのみが、現在の韓国社会にあって「あらたな暴力表現の唯一の可能性である」と金芝河は力説する。かれはいう、物神の暴力のもとでひとえに熾烈な悲哀と澱りとして沈んだ恨（ハン）は、それとしては悲劇である、と。なぜそういえるのか。それは、歴史の必然性のもとで没落せざるをえない階級の、主として実現不可能な要求にもとづく感

情の表現であるからだ。

悲劇的なるものと、喜劇的なるものについて、マルクス主義はどのように考えるか。エンゲルスは、「歴史的に必然な要請と実行不可能なこととのあいだの」衝突は悲劇的であるといった(注14)。また、マルクスは、一八四〇年代初頭のドイツの現状を分析してつぎのようにのべた。

△ドイツの政治的現在にたいする闘争は、近代諸国民の過去にむけられた闘争であって、この過去のなごりのために、それらの諸国民はいまもあいかわらずなやまされているのである。かれらの国でその悲劇を経験した旧政治がドイツ的亡霊としてその喜劇を演じるのをみるのは、かれらにとって教訓ぶかいことである。旧政治が世界の先在的権力であり、これに反して、自由が個人的な一着想であったかぎり、一言でいえば、旧政治がみずからその正当さを信じ、また信じないではいられたかぎり、旧政治の歴史は悲劇的であった。旧政治が現存の世界秩序として、うまれかかったばかりの世界とたたかっていたかぎり、旧政治のがわにあったのは世界史のあやまりであって、けっして個人のおやまりではなかった。だから、その滅亡は悲劇的であった。

これに反して、いまのドイツの政治は、一つの時代錯誤であり、一般に公認された定理にたいする明白な矛盾であり、衆目の環境にさらされた旧政治の無意味さであり、ただじぶんだけで自信があると思いきんでいるにすぎないの

に世界にむかってこれとおなじ自惚をもと要求している。もしそれがじぶんの本質を信じているのだったら、その本質を他の本質の外見のもとにかくしたり、偽善や詭弁に逃げ道をもとめたりするだろうか？ 現代の旧政治はもはや世界秩序の喜劇役者でしかない。その真の主人公たちは死んでしまったのだ。歴史は徹底的であって、旧形象を墓場へはこぶときにはいくたの段階をとるものである。世界的形象の最後の段階は喜劇である。(中略)なぜ歴史はこういう道筋をとるか？ 人類が過去からほがらかに訣別するためである。われわれはこのほがらかな歴史的運命がドイツの政治的権力をみまうことを要求するものである。▽
(注15)

一方、悲劇的表現を吸収した喜劇的表現のなかに特別の価値をみいだした金芝河は、両者の関係についてものべている。△大体において悲劇的表現は、ある時代、ある社会における貴族的生活意識の末期的産物であり、喜劇的表現は、ある時代、ある社会で抑圧されてきた、しかし勃興しつつあった平民意識の初期の産物である。悲劇的表現は程度の差はあっても大体においてその主要な葛藤が人間と運命、あるいは人間と神のあいだの観念的な矛盾から発生する。喜劇的表現は程度の差はあるがその主要な葛藤が人間と人間、すなわち支配する者と支配される者の相互の現実的・具体的な矛盾から発生する。

今日、貴族も平民も、かつての、かれらではない。今で

はかれらの表現のみが残っており、その表現のなかにきりめいていたかれらの生活の適合性は、もはやあとかたもなくなつてしまつた。あらたな対置が現われている。このあらたな対置の反映と芸術的形象化において、その表現がどれほど効果ある移越価値として作用するかが問題である。素朴な意味における悲劇的表現にのみ全的に依存し、詩人自身と現実の大衆の悲哀と暴力の発現を肉体化しようとする志向は誤りである。また、素朴な意味における喜劇的表現に全的に依存して、詩人と大衆が受けた暴力と暴力の止揚者が、悲哀より発生するものを形象化しようとする志向もまた同じく誤りである。重要なことは現実のもつとも鋭い要請の内容であり、この要請に従つて両者はあらたな効力を帯びた形式価値としての重要性が決定される。この二つの志向は互いに補いあい、互いになんらかの形態の自己変更をなしとげることによつて、ある程度新しい暴力表現となることができるといふことができる。V

金芝河はいふ、喜劇的表現は、ある時代、ある社会で抑圧されてきた、しかし勃興しつつあった平民意識の初期の産物である、と。なぜそういえるのか。それは、徹底して抑圧され、しかし勃興しつつある階級の要求実現は大いに可能であり、その階級の最終的解放は世界史の最後の段階となるからである。

歴史は繰り返す、一度目は悲劇として、二度目は喜劇として。なぜ歴史はこういう道筋をとるか？ それは「人類が過

去からほがらかに訣別するためである。」というマルクスの歴史認識にたいする確信は、「ソルジェニーツインと私」のなかで金芝河が表明した「私は道化した楽観主義者である」という確信につながるものでもある。

では、ここにのべたような表現形式を採用してかれが立脚する大衆（あるいは民衆）とはいかなるものなのか。「良心宣言」でもかれの大衆観が語られたが、ここでは金洙暎の誤つた大衆観にたいする批判の文脈のなかで、諷刺のありかたと関連させて、つぎのように、より明確に語られている。

（また、かれ（金洙暎）が罵倒した小市民は、たとえばかれらが多数だとはいへ、巨大な大衆のなかではごく一部にすぎない。実際は小市民が、大衆の社会生活の前面に生き生きとクローズ・アップされる特徴的な一段階にきているということが事実であつて、したがつて小市民的な否定的要素が表面的には大衆全体の本質を支配しているかのようにみえる。しかし、そのような要素も、特殊集団の悪徳と対比させる諷刺のなかでは、決して全面的・敵対的な罵倒によるのではなく、部分的な罵倒の方法によつてとり扱われねばならない。これは六〇年代後半期よりも七〇年代、とりわけ現在から今後、現実の状況の変化にしたがつて大衆の意識形態がしだいに、あるいは急激に変わるだろうという予想と関連させるとき、いっそう主要な問題となる。この世に変化しないものはなく、ただひとつ変化しないものは、万物がすべて時の流れに従つて変化するという法則だ

という昔からの教えを信じて、また時々刻々変化している現実を深く広くそして遠く見とおすことができるなら、そして未来の変化を確信するならば、民衆を全面的に肯定する方向をとることがむしろ当然なことである。民衆の巨大な力を信じなければならぬし、民衆を超越しようと考えたのではなく、民衆のなかにはいり、かれらとともに生きる自分自身を確認し、すすんで民衆あるいは大衆としての自己を肯定する立場に到達しなければならぬ。詩人は部分的な大衆諷刺をつうじてかれらを啓発しなければならず、大衆的不満を爆発させる方向へと諷刺の暴力を集中させることによってかれらを目覚めさせ、かれらのあらゆる活力の進撃方向をさし示さねばならない。▽

金洙暎が罵倒した「小市民」の実体がなにであり、金芝河が依拠せよという「巨大な大衆」がなにを示すか、もはや説明するまでもなからう。大衆の厳密な内部構成の分析にもとづいて、金芝河の戦略が「反ファシズム闘争の文学」と、かれじしんにも認識されているのではないか、とわたしが考えるゆえんのひとつがここにもある。またかれが、対象を分析するにあたって駆使する弁証法の手法は、かれの言葉をかりれば「大学時代に西欧哲学と美学を系統的に勉強し」身につけたものであったという(注16)。

金芝河の表現形式について論ずる場合、忘れてならないのは、かれのリアリズムの立場であろう。かれは、金洙暎文学の意義と限界を剔出しながら、わたしがいま紹介したような

表現形式を首唱するのであるが、その表現形式のなかに吸収すべき民衆の伝統芸術について論じたあと、つぎのように一応のまとめをしている。

△はたして今日の韓国の詩は大衆に見捨てられたまま自殺するほかはないのであろうか？ 否。民謡はいまだに強力な効力を大衆のなかにもっており、この効力は韓国の詩が諷刺と諧謔に目をむけるととき、いうまでもなく大きく拡大されるであろう。正しい抵抗的諷刺と大衆的諧謔の詩をつうじて伝統とあいまみえ、伝統民謡と現代の生活言語の高揚した詩的統一をつうじて詩の効力、および現実と大衆にたいする詩精神のエネルギーが強化され、大衆のなかに爆発的な力をもって拡大してゆくのである。これは決して質の低下を意味しない。あらたな質を高める努力として理解されなければならない。社会の現実を縮図として反映し、社会の現実と個人内部の葛藤を表現すると同時に、それを克服しようとするたたかいを放棄せず、主体的な言語の伝統を確立しようとする努力を中断しないとき、はじめて詩の敗北は詩の勝利にとってかわるのである。▽

わたしは先に、「ソルジェニーツィンと私」を紹介したときに、そのエッセイからよみとってほしいとして、「自然主義の一面性を克服した能動的なリアリズム」なる耳慣れない表現を使った。というのは、「真の民族文学は、わきたつ現実的内容の圧倒的な挑戦を前にして、いきいきとした民衆的

情緒の表現に密着した独特の民族的・平民的形式が、批判的に吸収された外来の健康な近代文学表現の原理とともに次元の高い知性の照明の下で卓抜に統一される場においてのみ、はじめて可能である」(注17)という認識にたつかれが、批判的に吸収されるべき「外来の健康な近代文学の原理」というとき、この伏字的表現にふくまれるひとつとして社会主義リアリズムをも検討の素材としながら、独自のリアリズム観を形成している、とわたしには思えるからだ。と同時に、民族的伝統芸術と外来の近代芸術を卓越した意味で統一させ、それをたたかいの武器にしようとして矛盾にみちた現実社会の変革と、芸術の革命の両戦線での闘いを追求したのは、この時期の韓国において、けっして金芝河ひとりではなく、金芝河と同時代の、若い芸術活動家たちとの共同作業の成果としても、この「諷刺か自殺か」をみなしうるからだ。

「諷刺か自殺か」が発表される前年の十月二十五日には、金芝河も加わっている美術家のグループが、「現実同人第一宣言」(注18)を発表している。この宣言でも、ダダイズムやポップアートなどのいわゆるモダニズム芸術を「俗物的・皮相的」な不毛なそれとして排斥し、現実社会変革への強烈な意志を媒介に、形式主義や自然主義の誤謬の一面を克服して民族の伝統芸術をふまえた現実主義芸術の立場を貫こうとするリアリズム観が打ちだされている。

たとえば、金芝河の、「社会の現実を縮図として反映し、社会の現実と個人内部の葛藤を表現すると同時に、それを克

服しようとするたたかい」は、この宣言にあるつぎのような観点にたつものでもあったろう。

△過去の時期の現実主義においては、抽象的思考が模写的思考に一般的に服従した。来たるべき新現実主義は、いっそう高められた幅広く弾力ある現実反映の強力な目的論的秩序の下で、すぐる時期に死に絶えた方法的特質としての抽象的思考の正当な生活力を回復し強化する方向である。

こうして現実主義はふたたびあるがままの現実の反映であると同時に、豊富な変型と抽象の可能性として強化された芸術的表現による現実の反映となる。▽

金芝河の仕事は、美術家もふくむ作家たちの、協同した努力の果実とっていいだろう。

「諷刺か自殺か」は、同世代の詩人たちにたいして、反独裁闘争への決起を呼びかけるつぎのような痛切な訴えで締め括られている。

△打ちのめされても倒れない者、四肢を引き裂かれても魂で勝利せんとする者、生き生きと火花のように燃え上がるうとする者、自殺を逆説的な勝利でなく完全な敗北の自認とみなし拒否しはするが生の苦痛に耐えることのできない者、生の力学を信じようとする者、胸に深い恨を抱く者は選択せよ。残された時は多くはない。選択せよ。諷刺か自殺か。▽

かれは、一九七〇年以降の創作活動をもって、自分じしんが発したアピールへの回答としたのであった。

戯曲にみる創作方法

一九七〇年以降に発表された金芝河のすべての作品は、朴およびそれに連なる内外支配層への痛打と、あわせて大衆へのアジテーションとプロパガンダを意図したもののばかりである。ここに、発表・発刊順にかれの主な作品（短詩をのぞく）を並べてみよう。

一九七〇年 長詩「五賊」、戯曲「ナポレオン・コニャック」
「銅の李舜臣」、評論「諷刺か自殺か」「民族のうた、民衆のうた」、詩集「黄土」。

一九七一年 評論「なにが私たちを貧しくさせたか」（注19）、

長詩「桜賊歌」、戯曲「金冠のイエス」。

一九七二年 長詩「蜚語」。

一九七三年 長詩「糞氏物語」、戯曲「チノギ」、長詩「五行」。

一九七四年 長詩「民衆の声」。

一九七五年 エッセイ「苦行……一九七四」、「良心宣言」。

これらを書き、発表する間にかれば、一九七〇年、七二年、七四年、七五年と四度も逮捕・投獄され、七四年四月以降は約一か月の一時出獄期間をのぞいて、二年半以上も獄中であり、いまだ囚われたままだ。一九七〇年は、それ以前に書きため、構想されていた作品の発表時期であったのだから、その他の年の作品数をみれば、朴政権のかれへの弾圧の意図が、かれから創作の筆を奪うことにあったのは明瞭である。

この簡単な作品年譜からも窺える革命作家としてのかれの方向を決定づけたのが、一九七〇年までに確立され、「諷刺か自殺か」と「民族のうた、民衆のうた」にまとめられた思想と創作方法であったことはすでにのべた。詩的暴力としての諷刺の手法は、「五賊」をはじめとする長詩の作品系列のなかに遺憾なく発揮されており、日本では既発表分のすべてが翻訳・刊行されているから、読者の皆さんがそれを直接読まれるようお勧めする。これらの詩作品を一読すれば、かれが「諷刺か自殺か」で確立した創作方法がどんなに力強いものであるかを読者は即座に了解できるであろう。これを理解するための作品分析はまったく不要だろうし、その紙幅もない。

ところが、かれのこの創作方法は、詩のジャンルに限定されているのではない。それはさきに列挙した四篇の戯曲にも共通してみられる創作方法である。

そういうわけで、ここではわたしは、二つの戯曲、「銅の李舜臣」（注20）と「チノギ」（注21）を素材にして、かれの思想が作品のなかでどう展開され発展させられているかをよりいっそう詳細に分析してみようと思う。

日本のいくつかの劇団でも上演されたことのある「銅の李舜臣」については、この作品を評価するひとの間にさえ、つぎのような躊躇を表明する傾向がある。すなわちそれは、この戯曲の結末で、作者は李舜臣に「燕よ、お前はなぜ来ないのか？」と悲痛な叫びをあげさせているが、この燕とは民衆

の革命的意識を目覚めさせる自覚した「知識人」を象徴するものであって、作者がこのような「知識人」の出現に期待を寄せているところに、この戯曲の限界があり、したがって、このような限界を意識した上で、この戯曲は演じられねばならない、という見解である。「銅の李舜臣」についてこのような評価がなされる背景には、この作品を翻訳した渋谷仙太郎と姜舜（カン・スン）の両氏がともに、それぞれの訳注において「燕」を「解放の象徴」であるとともに「民衆をめざめさせる知識人」でもあるとしたことに原因があるのかもしれない。

たしかに、劇のラストでの李舜臣の嘆きの言葉を、作者の「解放への渴望」とみるだけでなく、「真の知識人出現への待望」の表われでもあると読みこむこともできるかもしれない。作中の一見「知識人」風の乞食詩人は、現実の矛盾をのしり暴露し、為政者の都合に合わせて矮小化された李舜臣像を本来の姿に戻そうとするのだが、同時に作者は、この乞食詩人にニヒリズムに色濃く呪縛された負の性格をも与えている。つまり、この乞食詩人には到底、民衆のなかにこそ存在する、いまは隠された変革のエネルギーを、民衆じしんに自覚させ、民衆を革命の行動にたたせることなどできそうにない（注22）、とみればみれないこともない。

だが、この作品を注意して読めば、乞食詩人にたいするこのような評価・性格づけとは裏腹に、李舜臣の真摯で全力かけた説得を頑なに固辞するばかりであった飴売りが、自嘲の

とりことなった乞食詩人の独白を聞いてはじめて李舜臣の頼みを聞き入れる決心をすることに、注目すべきである。この飴売りが、ずるくて疑い深く、エゴイストで優柔不断にはみえても、究極的には革命の主体たるべき民衆の典型像にほかならないのである。一方で、作者は、「民の暮しが苦しみの極みに達しているというのに、何ひとつ本気で助けてやることもできず、国の内外に憂いがみちみちているというのに、なすすべもなく、こうして大きな剣をつき立て立つばかり。眼をむいて虚勢を張る銅の殻のなかにこうして閉じこめられ身動きひとつできない」と嘆く李舜臣に、民族の革命的伝統を体現する人物、解放闘争の指導者・前衛としての性格づけをしている。だが、民族の悲哀を一身に背負って、やりばのない無念さははらすべく民衆を真心こめて説得しようとする李舜臣の溢れるような熱情にたいして、民衆たる飴売りは、「手前の腕には五人の家族がぶらさがってるんでござえますよ。手前にもしものことが起きた場合、あいつらは一体どうなるんでござえやすか？ 手前を哀れと思っただけ見逃してくだせえよ」といい、李舜臣をして「そうか。それを私は知らなかった。私が欲をだし過ぎたのじゃ。帰りなさい。」といわしめるのである。

こうして、期待をかけた飴売りが（＝民衆）に裏切られた李舜臣は、一声「燕よ！」と叫んでよろめきながら銅像の台座にもどる。やがて夜、この夜も銅像の足許にやってきた乞食詩人は、銅像の李舜臣を偽物と罵り、あざけり、殴る蹴るの

はてにその場に眠りこむ。乞食詩人が罵る銅像は、朴政権のもと一九六八年に建てられたものである。だとすれば、この詩人の罵り、あざけるものが、民族の主体性をいい、「韓国的民主主義」なる代物を発明し、世界の帝国主義勢力と手を携えて自国民をたぶらかし搾取・抑圧する朴政権によって正反対のものに作りかえられた民族の革命的伝統でなくて何であらうか。李舜臣のように歴史の未来をまっすぐ見据え、民衆の解放の必要をとくだけでは、結局、暗いとはわかっていても民衆は現実社会の一条の光に幻想を抱き、そのなかに逃避してしまふ。乞食詩人は「両の目はおおわれ／耳すら塞がれ／舌を截られた詩人よ／語れ全身で／夜は夜だと／闇は闇／すべての光が没落する墓場だと／語れ、語れ、ひき裂かれた体で」と歌いながら、のたうち、うめき、苦しむ。乞食詩人は、「肉体の死は瞬間の喪失／汝、詩人の死／言葉の死、魂の死、時代の死／死の死／死の死の死の死の死の死」と叫んではみても、実際は死ぬことすらできぬ醜悪な自分じしんの生きざまを民衆にみせつけるのである。だからこそ、乞食詩人の自嘲的なニヒルな独白の外皮にまどわされず、飴売りは、乞食詩人がつきだす民衆と民族の悲哀を自分じしんの悲哀として認識し、確信にみちた語りかけだけでは飴売りを説得できなかった李舜臣にむかって、ついに、「さっきは手前が思い違いいたしてやした。手前ひとりの体のことしか考えていかなかったんでごせえやす。將軍さまのおっしゃる通りにするのがあたりまえだったのにですよ……」と、翻意を

表明するにいたるのである。

このようにみてくれば、この乞食詩人がこの一幕物の戯曲のなかで重要な転換点を生みだす役割を担わされているのは明瞭ではないか。「燕よ、お前はなぜ来ないのか？」という李舜臣の嘆きは、ラストで突如登場する官憲によってやぶられる、李舜臣と飴売りと乞食詩人の、つまり抑圧され収奪される人民の解放の夢がなぜこないのかという、作者による観る者への、文字通りの問いかけだと解すべきであろう。この問いは、作者とともに、観る者が、つまり韓国の民衆とわれわれが、ともに考え解決せねばならぬものだとして理解すべきではないのか。この問いに、一人の、ないし幾人かの自覚した「知識人」を対置させてすますことはできない。なぜなら、「知識人」というものがあるとすれば、金芝河は、民衆と飴売りに対する「知識人」の役割を、すでに李舜臣と乞食詩人という二人の異なるタイプの「知識人」によって描ききっているとなわしは考えるからだ。したがって、李舜臣の希求する「燕」、すなわち民衆解放の夢を運ぶべき実体として登場させねばならぬものは、曖昧模糊とした「知識人」などでなく、いっそう広範な、団結した民衆でなければならぬ。（それはわれわれをも含むものだ。）

わたしはなにも、自説を擁護するために我田引水の作品分析をしているのではない。作品を丹念に読み、作中人物とともに悩み、作者が与える材料を判断の素材としながら、冷静に思考をすすめるならば、いまのべた結論にたどりつくと思

うのだ。金芝河のこの作品は、観る者（読む者）への、このような教育的配慮がほどこされておき、それが同時に作品の内容を深め、読むものを感動させるのだ。したがって、この作品の上演にあたって、最も配慮されるべきはこの点であるべきだ。

李舜臣の「燕よ！ お前はなぜ来ないのか？」という悲痛な問いかけは、作者じしんとわれわれへの問いかけである、とわたしは書いた。ところで、作者はこの問いにどのような答えるのか。その一端を示すのが、三年後に書かれた「チノギ」であり、すでに紹介した「宣言 一九七五・三・一」である。そこでは、団結し、統一した、国境をこえた民衆の闘争が、世界を変えるという思想が闡明されている。ひきつづき、「チノギ」をとおして、かれの思想と創作方法をみてみよう。

「チノギ」は昨年日本で、在日韓国青年同盟によって朝鮮語で上演され、この全国上演活動が反朴の政治闘争ともなったことから、よく知られている戯曲である。韓青同による上演活動は、政治闘争と芸術の結合のよき見本であると同時に、優れた芸術作品がいかにひとの心をうち、いかに運動を組織する物質力をもつかを示す好個の実例であった。

さて、この一幕物の戯曲は、三匹のトッケビ（鬼）と四人の農民、ひとりの娘、解説者によって演じられる。

登場人物にはそれぞれ、つぎのような性格と役割が与えられている。

解説者Ⅱ農村で食いつめ、都市へ流出した貧農のむすこ。かれはあるとき、トッケビたちが話しているのを盗み聞きし、なぜ韓国の農民が貧しいのかを知る。舞台に場の転換を与え、劇を進行させる。

小農鬼Ⅱ主として封建遺制の弊害を象徴する鬼。

外穀鬼Ⅱ主として外国勢力と結ぶ資本主義経済の害悪を象徴する鬼。

水害鬼Ⅱ主として国内政策の無為無策からくる災いを象徴する鬼。

マルトックⅡ小農。協業の熱心な賛同者。失敗しても挫折せず協業実現への夢を最後まで捨てない。それは、かれが土地や農機具、牧畜などをほとんど所有していないからである。

テテⅡ中農。協業に賛成しながらも、自分が提供した生産手段にみあう自分のとり分をつねに計算し、それを少しでも多くしようとする。そのため、協業にもしよっちゅう動揺する。

ケドチⅡ農村出身の協業のオルガナイザー。農民にたいする啓蒙者。最初の敗北で挫折したとき、マルトックとプニの批判でたちなおる。

マンマクテゴルⅡ富農。はじめは協業の反対者、妨害者。プニの父親。

プニⅡケドチの恋人。韓国社会の封建遺制のもとで呻吟し変革を求める女性。

「チノギ」は、三匹のトッケビに象徴される韓国の内外支配層と農民の闘争を描いた戯曲である。わたしは、この戯曲をつぎのような点で評価すべきだと考える。

△1▽観る者を、すなわち、直接的には農民を、社会変革の闘争へたたせるアジ・プロの教育的機能をもっていること。支配形態の典型化と民衆の典型化をおこない、社会変革への理性的な対応を観客がうみだすよう書かれていること。

△2▽したがって、どこでも上演できるように舞台装置や衣裳が簡素化され、演技者の数も最小限におさえられていること。

△3▽解説者の語り口、トッケビの仮面、パントマイムの多用などにみられるように、韓国の民衆芸術の伝統や近代芸術上の諸手法が意識的に、巧妙豊富にとりいれられていること。（これらも作品の内容に奥行きをつくりだし、質を高めることに寄与している。）

△4▽最初の敗北、二度目の勝利を描きわけて、支配層の打倒は、闘争主体の広範な団結による社会構造の変革ぬきにありえぬことを示している点。

△5▽登場人物の置かれている社会環境を具体的に明示し、存在によって規定される諸階層の意識を典型化し、韓国の典型的な農村社会の変革とともにこの意識を変革する革命戦略を提案していること。（かれの革命戦略によれば、生産手段の私的所有を共同所有に移すこと、その条件のもとでの労働である。劇中でこの革命戦略を担う中核は、マル

トックとプニであり、それに支えられたケドチである。）以上を、作品に即して具体的にみてみよう。

「チノギ」は、解説者の語りによってはじめられる。解説者は、農楽のリズムにのって登場し、踊りながら歌う。

△「農は天下の大本なり」ということばがありやすが、そいつあ、まっかな嘘っぱちでござえやす。いちばんあわれなのが百姓で、いちばんしいたげられているのが百姓じゃ。ところが、いちばんよう働くのが百姓で、この世でいちばん正直なのも百姓じゃよ。よう働いて正直なのに、なんで貧乏で、なんでいやしめられ……いじめられ、しいたげられねばならんのか？ ……さあ、その仔細を、どれ、いれどさぐってみやしょう。そおれ、鳴らせ！ シーッ▽

解説者は歌いながら観客に問う。解説者は、赤貧の百姓のこせがれとして生まれ、農村で食えなくなり都会へ出、そこでも飢え、殴られ、ぼろをまとい、病み、寝るところもなくさまよっている自分の来歴を、面白おかしく、諧謔をまじえ、歌いながら観客に伝え、なぜ百姓たちがこの解説者のように暮せなくなるのか、そのわけをこの劇でみせようというのだ。

解説者によれば、百姓が暮らせなくなるのは、三匹のトッケビ、つまり小農鬼、外穀鬼、水害鬼が百姓の肝をとって食うからだという。

△百姓が暮らしていけないのは何のためか。誰のために暮らしていけないかがはっきりとわかったんでやすよ。

運命のためじゃない。運命のためでなけりゃ、では何の

ためですか。ハハハハハハハ、トッケビのためですよ。はい、トッケビ。

そのトッケビどもがまつわりついて、百姓たちを暮らしていけなくしているんですよ。

その日の朝、トッケビが三匹集まって、連中のあいだで百姓の肝をとって食おうという話をしながら、ヒッヒッヒッヒとしのび笑いするのを、このあっしめが立ち聞きしたというしだいでやすよ。

この話を聞いていると、今までモヤモヤとしていたものがバッチリと解けて、なんで百姓が暮らしていけないか、はつきりとわかったということでごぜえやすよ。はい。

エッ？ 何ですって？ そんなことがあるかって？

チェッ！ こちとらのことばを信じないんでやすな。

じゃあ、トッケビどもがどうやって百姓たちを暮らせなくしているか、どれ一度、お聞かせいたしやすかな。オホン、オホン。V

解説者の語りをプロログにもってくるこの形式は、「五賊」や「糞氏物語」のそれと同じである。同時に、詩やうたが豊富につかわれている「チノギ」は、金芝河の主要な作品系列である長詩において、かれがつくりあげた手法を十二分につぎこみ、集大成しているといえる。

金芝河がまた、「チノギ」に喜劇的要素を導入し、舞台と観客の関係を相対化して観客が舞台上で展開される事件を理性的に観察できるようにするために、道化役の解説者を設定し

たことにわれわれは注目してよい。このような道化役の使用や前口上の形式は近代ヨーロッパにおける民衆劇の伝統的形式のひとつであり、それはまた叙事詩における語り手の形式でもある。かれが「チノギ」において登場させた解説者の語り口や、トッケビたちが百姓の肝をとって食うという発想が徹底した反ブルジョワの諷刺詩人ジャック・プレヴェールの叙事詩「馬物語」とよく似ているのは、必ずしも偶然の一致とはいえないだろう、とわたしは思う。なぜなら、プレヴェールは、シュールレアリスムを止揚して諷刺と諧謔にみちた大衆的な民衆詩をつくりだした詩人であって、同じくシュールレアリスムを研究し、その影響をうけたと思われる金芝河が「諷刺か自殺か」で明らかにした創作方法に到達する過程で、フランスの二人の詩人、プレヴェールとエリュアールの作品も検討の対象にしたに違いない、とわたしが想定するからだ。

「正しい抵抗的諷刺と大衆的諧謔の詩をつうじて伝統とあいまみえ、伝統民謡と現代の生活言語の高揚した詩的統一をつうじて詩の効力、および現実と大衆にたいする詩精神のエネルギーが強化され、大衆のなかに爆発的な力をもって拡大してゆく」とするかれの考えは、演劇においても貫かれる。

かれは、「チノギ」において、長詩や他の戯曲と同様韓国民衆に伝わる民衆芸術をふんだんに導入する。解説者のうたと音楽と踊りは、農村に伝わる農楽である。トッケビたちは、民衆のあいだに伝わる仮面劇の伝統をひきついで仮面をかぶ

って登場する。トッケビたちは、封建制朝鮮の支配階級を表わす両班（ヤンパン）踊りや、民俗芸能として伝わるライ病踊りを踊る。うたや踊りによって、観客である農民は、登場人物の階級的性格を瞬間的につかみとるに違いない。

と同時に、伝統芸術のなから採用された仮面やうたや踊りが、作者によって演劇的処理をどここされて、あらたに舞台で表現されたとき、この伝統芸術は別のものに生まれ変わる。「チノギ」で採用されている伝統芸術は、封建制や帝国主義にたいする抵抗闘争のなかで生みだされ、現在では祭事のだしものや娯楽の対象となっていたものである。ここでの演劇的処理によって、この伝統芸術にこめられていたかつての民衆の悲哀や支配層への怒りは、歴史によって隔てられていた時間的距離を飛びこえてふたたび現在の舞台にもどってくる。このようにしてトッケビの性格はきわだたせられ、きわだたされたトッケビの性格が観客の理性の働きによって現在の支配層の悪徳とむすびつけられたとき、伝統芸術は現代的な生命をもってよみがえるのである。

このように、金芝河はかれの創作方法にもとづいて、この作品でも民衆の伝統芸術に依拠する諷刺のとげを研ぎすまし、観る者をひきつけ、観客の思考をうながす。

一方、トッケビと農民たちの演技においてはパントマイムが重要な位置をしめ、それと組み合わせられてスローガンが多用される。たとえば、小農鬼を性格づけるスローガンは「小農経営、小作制、篤農家投機、封建遺制」であり、外穀鬼は

「外穀導入、低穀価、不等価交換、貨幣経済」であり、水鬼のそれは「水害、旱害、病虫害、延帯利子、長利害」であって、これらそれぞれのスローガンの呼号が、農民をいためつけるトッケビたちの武器ともなる。

これにたいして、協業でたちむかう農民たちのスローガンは、「部落会議は民主的に！」「意見を集めて選挙をして」「仕事はたがいに分けてやり」「共同購入」「共同収穫」「共同脱穀」などである。劇中で歌われる協業のうたもそのひとつである。さらにまた、トッケビたちとの闘争の勝利をつげるラストの場面では、プラカードがとびだし、それに書かれたスローガンをトッケビたちにむけて農民たちは口々に投げつける。「小農経営を打破しよう」「不等価交換を打破しよう」「外国穀物の圧力を克服しよう」「村の金庫を強化しよう」「自然災害を征服しよう」と。そして、プラカードにあわせたスローガンの呼号のうたのなかに観客をまきこみ、演技者と観客がひとつになって群舞するよう計算されている。

このような構成をもつ「チノギ」から、マヤコフスキイらロシア・アヴァンギャルドのアジ・プロ演劇やブレヒトラドイツ革命演劇の影響などを、わたしは想定する。

「チノギ」でもうひとつ評価されるべきは、ここで展開される革命戦略である。

韓国農村を支配する勢力の象徴であるトッケビと闘う農民の武器は協業である。劇中でいわれている協業を要約して紹介するとつぎのようになる。

一、村民が各自所有する土地やその他の生産財を一つに差しだし、部落会議をひらいて協業経営体をつくる。

二、協業経営体は協業定款をつくり、農作業計画をたてる。

三、協業経営体のもとに作業班をつくる。肥料や飼料や農薬や、農機具や種子などを共同購入し、農民がそれぞれの特技や能力をだしあって、田畑を全員で共同耕作し、共同収穫し、共同出荷する。

四、売りあげから地代一割をはじめ必要経費を差しひいて残りの純益を、土地所有者に二割、労賃に六割、村の共同基金に二割を分配する。共同基金は新規事業の拡大などにあてる。

この構想はつまり、かなり社会主義的な集団農業である。

といっても、この協業をすぐさま「社会主義的」と呼ぶことはできない。「チノギ」における協業は、資本主義的商品経済を前提としており、生産手段（土地、農機具、その他）の共同所有については必ずしも、明確化されていないからである。たとえ、社会主義中国における集団農業と「チノギ」のそれに形態上の相似点があるにしても、プロレタリア独裁の権力のもとで資本主義的商品経済の存立条件をひとつひとつ打ち壊し、土地も没収や買い上げによって共同所有にうつし、農民が個人用に人民公社から割りあてられた自家保留地さえ農民が自発的に廃止するような運動と政策としてプロレタリア文化大革命がおこなわれた社会主義的集団農業とを等しくみることはできない（注24）。

しかし、「チノギ」において金芝河は、協業を実現されるべき最終段階のユートピアとして描いているのではない。それはたとえ、つぎのようなやりとりとなって表われる。

資本主義経済の矛盾から協業は自由ではありえないが、その不安を、テテは「だけどさ、肥料代とか農機具代が高いけど、それはおれたちどうすればいいの？ おまけに外国の穀物のために米が下がるのをおれたちいったいどんな手で防ぐんだい？」といってもらす。これにたいしてケドチは、「そりゃ、おれたち農民がだんだん力をつけて、たがいに団結すれば解決できるさ。そうした大きな力をつけようとすれば、まず、おれたちからして力をあわせなきゃだめだ。おれたちのあいだでたがいにけんかばかりしてるのに、どうして村同士が力を合わせられるんだい？ 千里の道も一歩からだ。まず共同で農作業をやり、共同で穀物売る協業から始めようや。」と答える。協業は実現すべき理想郷ではなく、トッケビ退治の第一歩だというのだ。労賃についてもケドチは、マンマクテゴルにむかっていう。労賃は「いまはまだ六割ですが、これからは少しずつ増やしていかなきゃならないでしょうね。土地よりは人の労賃のほうがもっと大事ですよ。とくに貧しい小農にはね……」と。このような叙述は、協業が社会変革の第一歩でしかなく、協業自体がつぎのたたかいのなかで変革されねばならぬものであると、作者がみていることを示している。

さらに、この協業は、農民にすんなり受け入れられるわけ

でもない。金芝河はそれを、すなわち協業をめぐって立ち現われてくる農民各層の支持と動揺と抵抗の反応を、小農Ⅱマルトック、中農Ⅱテテ、富農Ⅱマンマクテゴルという三人の演技者に演じわけさせている。協業にまっ先に賛成するのはマルトックである。テテはマルトックといつもいがみ合い、協業にたいしても労賃に比して土地提供者への分配が少ないこと、共同事業基金が多すぎることを理由に不満をもっている。だから、協業を妨害しようとするマンマクテゴルの甘言にものりやすい。しかし、テテは説得されて協業に参加する。一方、マンマクテゴルは、富農である間はどんな説得にも応じぬばかりか、娘を協業からひきぬぎ、テテをもひきぬいて協業を失敗させようとする。かれが協業に参加するのは、トッケビたちによって牛や耕耘機や脱穀機や乾燥機や精米工場を失い、復旧工事をしなければ使いものにならなくなった農地しか残らず、そのうえ農民たちに残った農地の復旧や耕作の賃仕事を拒否される現実を直面してはじめてである。

金芝河は、農民の意識のあり方が、土地やその他の生産手段をもっているかどうか、どのような社会生活を営んでいるかという、その農民のおかれている客観的な存在条件によって支配され、そのうえ、意識変革のあり方もまた、客観的存在条件に大きく規定されているのであって、個人の性格の良し悪しに規定されていないことを、それぞれ、個性豊かな農民像をとおして描いている。

さらにまた、協業の理論家であり組織者であるケドチが、

農民の団結が破れてはじめての協業が失敗したあと、つまりトッケビに敗れて深い絶望と挫折感にとらわれ、協業によるたたかいを放棄しようとしたとき、これを批判によってはげまし、もう一度協業に夢をかけるようしむけるのは、生産手段をほとんどたぬ小農のマルトックと、資本主義社会の矛盾に加えて封建遺制によってもっとも抑圧されている女性のプニであった。そして二人がケドチを説得している様をみてもう一度協業をやってみようと思いたつのが、中農のテテであった。もっともしいたげられ、もっとも抑圧されている民衆が偉大な力と強い意志を秘めており、この民衆に依拠しなければ詩も詩人も生きられないと主張する金芝河の大衆観が、ここにも表現されている。

以上のような特徴を、この戯曲から引きだしたうえで、この戯曲全体をとおして金芝河が描こうとしたもの、それが何であったのかを考えてみよう。まず「良心宣言」のなかのつぎの一節に耳を傾けよう。

ハキリスト教サンチアゴ宣言（一九七三年）に提示されているような、マルクス主義等の社会改革原理とキリスト教思想の統一にかんしては、私も同じ関心を抱くようになったのであるが、それはたとえばマルクスとイエスの結合を考へる場合、マルクスからは社会的抑圧が人間の救いを妨げるといふ構造的認識論が選択され、イエスからは万人にたいする愛と人間の尊厳を主張するヒューマニズム、人間の救いの契機である「重生」の強調、そして歴史のなかで

審判し、公平を実現させ解放をもたらす希望の神——ナザレの人イエスが模範として示したもろの活動が選択され、両者が統一することについての関心である。V

このような認識をもって金芝河が、かれなりに捉えたマルクス主義の「構造的認識論」にもとづく韓国社会変革の方法論は、社会主義革命であって、韓国社会へのその認識の具体的適用を芸術的に試みたのがこの作品であるといえないこともない。かれが農民各層の意識分析と農村経済分析にみせた視点は、かれの「構造的認識」の確かさを立証している。また、トッケビ退治の戦略として、社会変革の道が提起されている点も見落せない。この社会変革の内容は、土地の共同所有（私有制の廃止）を展望するものであった。社会主義革命によって生まれたばかりの社会は、旧社会の母斑をいたるところに残しており、だからこそ社会主義権力下でうちつつく革命が必要であるとすれば、協業の首唱者であって、協業それ自体が過渡的なものであり、変革されねばならぬ対象であると示唆するケドチは、そのことをある程度理解しているといえる。このようにみてくれば、「チノギ」とは、社会主義的内容を韓国民衆の革命的伝統芸術と近代芸術の統一された形式によって表現しようとした作品といえよう。

これが前節からひきつづく作業として、わたしが二篇の戯曲のなかから抽出したかれの革命的思想と創作方法の一端である。

最後に、わたしは、つぎの点をどうしても指摘しておきた

い。それは、「チノギ」の協業理論家ケドチの限界についてである。つまり、トッケビ退治すなわち革命にとって、たとえ農村の革命にとつてさえ、協業の実践を成功させるためには、協業を実行し支持する階級の共同関係、全国的結合、それらを基礎にした政治組織が必ずなくてはならぬはずであるにもかかわらず、この点でケドチの戦略が空白であることだ。

ケドチのこの弱点を、テテは、「だけどさ、肥料代とか農機具代が高いけど、それはおれたちどうすればいいの？ おまけに外国の穀物のために米が下がるのをおれたちいったいどんな手で妨ぐんだい？」という素朴な、しかし核心をついた質問によって浮き彫りにしてしまった。ケドチは、農民がだんだん力をつけること、農民が団結すること、という回答しか持ち合わせていなかった。ケドチの協業理論には、小さな閉鎖的な農村社会の改造プランはあっても、農村社会の全体をのみこんでいる資本主義韓国、それと密接な関係をもつ資本主義諸国との諸連関についての考察はなかったのだ。ケドチのいまの理論でも、ケドチたちの村からトッケビを追いだせるかもしれない。しかし、それはあくまでも一時的なものであって、トッケビは協業農村のまわりの農村において、さらにケドチたちの共同購入、共同出荷の相手先である都市で策謀をはりめぐらせ、協業農村を結局は窒息させてしまうだろう。これに気づき、ケドチたちが、協力者として都市労働者をつつけだしたとしても、それだけではトッケビに勝利するには不十分だ。それは、つぎのような農民の一般的な性

格からくる。

どんなに暴力的で決断に富んでいても、農民の気質の特徴は、その社会的な存在のあり方に規定されて、むら気で、持続性がなく、一揆的である。

それにひきかえ、工場や事業所や事務所まで資本にきたえられ、資本との日常的闘争でみずからをきたえるプロレタリアートの徳性は持続する団結と統一、革命的規律である。これらは永くつづく革命の主体に不可欠の徳性である。これが、中国やベトナムで、そして朝鮮半島の北半分で勝利した共産主義者が、たとえ国民の圧倒的多数が農民であっても、その農民をプロレタリアの思想で武装させ、階級としてきたえあげ、それを基礎に前衛政党を強化した理由である。さらにこれが、農村社会において、生産手段をもたない貧農—農業労働者に共産主義者が特別に注目し、依拠する理由である。

都市と農村の、つまり労働者と農民の協力と結合は、このように、共産主義者がすでに実例をもって提出した歴史的経験にもとづかねばならない。それこそが勝利の鍵である。

ケドチたちはもう一度協業に失敗する公算が大きい。だが、団結の力は失敗するまえに、協業を支持し実行する階級の共同関係（都市の労働者階級と農村の貧農）、それらの全国的結合と政治組織の必要をかれらに気づかせるかもしれない。一九六五年で二七〇万人、七五年には五〇〇万人と労働者の数を急増させている韓国資本主義の発展が、それを英明なかれらに気づかせるかもしれない。あるいはそれは、もう一度

の失敗のあとになるかもしれない。

いずれにしろケドチたちは、テテの素朴な質問のもつ重味を実感するときがくるだろう。そしてそのとき、まちがいなつかれらは、今度こそ必勝不敗の行進を開始するだろう。

連帯闘争の視点

前節まででわたしは、韓国民衆のたたかう知性に学ぶというモチーフのもとに、金芝河のいくつかの発言や作品を紹介しながら、革命作家としてのかれの姿勢を思想、創作方法、それらを形成していくかれの努力を描こうとした。しかしここでふれえたのは、かれの仕事のごく一部にすぎない。また、苛酷な弾圧、とくに「反共法」によって生命の抹殺を企まれ、現にそれへの反対闘争がとりくまれていくかれの発言に言及する場合、当然の制約が働かざるをえなかった。このような制約を自覚したうえで、非力をかえりみずあえてわたしがこの筆をとったのには、金芝河をはじめとする韓国民衆のたたかう知性に学び、強力な連帯闘争を展開しようとする姿勢が、まだまだわれわれの間で弱い現状があるからだ。

とくに、連帯闘争の中軸となるべき日本の労働者階級や労働組合活動家、さまざまな戦線で活動している大衆運動活動家や左翼諸政党・諸グループ、とくにマルクス主義者の側のとりにくみの弱さがあるからだ。日本の労働者階級・人民にとって、南北朝鮮人民との共同闘争はつまるところわれわれじ

しんの解放闘争前進の鍵であるにもかかわらず、この真理を具体的行動で表わせない日本人民の鈍感さがあるからだ。

問題の所在を際立たせるために、ひとつの例をあげよう。

昨年四月、「民青学連事件」に関連して徐道源（ソ・ドゥオン）、都礼鐘（ト・リェジョン）ら「人民革命党」グループの八名のひとびとが朴政権の手によって絞首刑に処せられたとき、日本の労働者階級はいったいいかなる抗議行動をとりえたか。階級としては眉ひとつ動かさなかったといっている。

これとまさに対蹠的だったのが、それから約半年後ヨーロッパの労働者階級が実際の行動によって示したたかいかであった。ヨーロッパの労働者は、スペインのフランコ政権の手によって「反ファシスト革命愛国戦線」のメンバーら五人が、同年九月末、銃殺に処せられたとき、全ヨーロッパ規模で抗議デモやストライキをくりひろげ、西ヨーロッパ九か国政府をつき動かし、スペイン駐在大使を本国に召還させるなどの行為すらとらせたのだ。ヨーロッパ労働者階級の行動は「スペイン人民への弾圧は、全ヨーロッパ労働者への弾圧」だという国際主義的な認識に裏づけられていた。

ヨーロッパの労働者によってこのとき発揮されたプロレタリア国際主義とは、他国における労働者階級・人民の闘争の進展が自国の労働者階級の闘争の前進と政治的・経済的・社会的に抜きがたく緊密な結合関係にある事実の洞察に裏づけられたものであり、具体的に有効な行動によって表わされる

ものであった。このようにたたかえるのは、ただ労働者階級だけであり、それだけ労働者階級、その前衛たらんとする活動家の責務は重いといわねばならない。

といっても、現在韓国のたたかひの最前線に位置するひとびとが、キリスト者であったり、共産主義と一線を画する民主主義者といわれるひとびとであったりする事実が、社会主義ないし共産主義を標榜するひとびとを当惑させているのかもしれない。だからといって、かれらの思想や行動のひとつひとつを真摯に理解しようとせず、かれらのたたかひを朴ファシズム政権との戦闘的対決姿勢、殉教者的献身性、人間性の発露などの点でのみ評価しては、運動が誤りに陥るだろうし、そのような評価にたつ連帯運動であるかぎり日韓両国人民の解放はおろか現在の「日韓関係」すら転轍できない。なぜなら、韓国民衆がたたかひにたちあがらざるをえない矛盾を生みだしている日本帝国主義と韓国支配層の結びつき、韓国内における階級対立そのものを最も鋭く糾弾し、明らかにしているのが、いまはかれらであり、かれらにおいて歴史の歯車を回転させる日韓両国民衆の連帯などありえないからだ。

もうひとつ、わたしが韓国民衆の知性に学ぶべきであると主張する理由には、かつてのベトナム反戦運動の経験がある。この運動がたとえどのような弱点をもっていたにしても、政党や労働組合や市民団体によってとりくまれ、とくに青年・学生層にあってはそれが主観的の誇りを免れないにしても相当

の意気込みと大衆性をもってとりくまれた。にもかかわらず、ベトナム人民のすばらしく深い透徹した知性から、日本の労働者階級・人民、なかならず「共産主義者」たらんとするものが、結局はなにほどのものも学べなかつた、という口惜しさがあるからだ。

世界的視野でみた場合、ベトナム反戦闘争は、共産主義者ばかりでなく、進歩的な立場にたつりべラルや民主主義までふくむ広範な思想潮流のひとびとによってになわれ、支えられた。しかし、中心となる勢力はあくまで社会主義諸国人民であり、資本主義諸国の労働者階級であり、民族解放をめざす諸国人民であり、それらを代表する政党であつた。このことはけつして、ベトナム戦争に反対する広範な国際的潮流をつくりあげていくうえで障害にはならなかつた。逆だつた。

ベトナム人民の闘争を指導するベトナム労働党と南ベトナム解放民族戦線によつて打ちだされる鮮明な革命路線に支持を寄せる国際労働者階級の運動、共産主義者のリーダーシップが、世界的な反戦運動の支柱とも屋台骨ともなり、それがまた、アメリカ帝国主義を弾劾しベトナム人民のたたかいを共感で迎える幅広い層の結集を、確實で力あるものとしたのだつた。ベトナムの共産主義者は、このような国際的反戦運動の形成に細心の注意を払い、国際的反戦運動を自国における革命戦略の一環にしっかりとくみこみ、ベトナム人民を勝利に導いたのだが、これらの事実が、共産主義思想の他の思想に対する優位性を立証したのもあつた。

資本主義諸国の各国ごとにみた場合、その国での反戦運動の構造は、必ずしも世界的規模での構造をそのまま縮小投影したものではなかつた。日本でもそうであつた。だが、大きな枠組でみるならば、日本においても運動の主軸を形成したのは、共産主義思想、社会主義思想に立つひとびとであつたし、階級でいえば労働者階級であつた。かれらこそが最も深く、ベトナム人民のたたかひから学ばねばならなかつた。

ベトナム人民がみせた献身的自己犠牲の精神、かいらい軍兵士や侵略軍兵士にたいしてさえ失わなかつた気高い人間愛（プロレタリア・ヒューマニズム）、革命的英雄主義などの実例がそこにはあつた。なかでも、ベトナム労働党が堅持した社会主義の革命路線とその裏づけとなる理論、国内における

あへっど

第30号

100円

△現場通信△

本性をさらけだした船主 舟山芳平
差別意識と海民懇のこと Y・H
船内委員会からの報告 豊祥丸

△反合理化・現場ルポ△

樽原豊 岬比呂志 岡山金也
前田弥市

△特集・七〇年代後半の海上労働運動を
どう切り開くか△ 大竹広 沖一

△記録△

通信士日記(二) 里見 猛

△詩△

相川きみつぐ

海上文化活動家集団

横浜市中央郵便局私書箱116号 振替 横浜3588

統一戦線戦術の展開と国際的統一戦線形成にむけた努力、国際共産主義運動統一をめざす革命的態度などから、日本の共産主義者はかぎりない教訓を得ることができたはずである。

だがそうはならなかった。

たとえ、ベトナム人民の闘いから、自覚的に教訓を導きだし、その教訓を日本における運動に生かしていこうとするひとびとがあつたとしても、それはバラバラな個人であるか、ごく小さいしかもいくつにも分離した諸グループでしかないのが、いまだ実情だ。そうである一方で、日本はベトナムと違う「先進国」であると強調しベトナム人民のたたかいと思想を貶めるものがあったり、マスコミの目がベトナムから離れるやすばやく「韓国」や、「ロッキード」に乗りうつる連中がでてきたり、はては無意味で非人間的な殺人ゲームにうつつを抜かしたりする情けないセクトがあつたりしている。

われわれは、韓国民衆との連帯闘争をおしすすめ、このよきな状態をも変革したいわけだが、それでもふたたびベトナム反戦闘争のときと同様の徹を踏まぬ、とはいいい切れないのだ。

われわれが、そのような弊害に陥らず、かつ、形式的な連帯にもとどまらず、フランコの暴挙にストライキで応えたヨーロッパ労働者階級の発揮したプロレタリア国際主義に一步でも近づき、連帯闘争の経験を無駄にすまいと決意するならば、連帯しようとする相手の思想や行動を理解し、それに深く学ばねばならない。

この小論は、右のような認識にもとづくわたしの作業の第一歩である。しかも、豊かな金芝河の思想の紹介としてはその一端にふれただけである。

金芝河は、「良心宣言」で、「マルクスとイエスの結合」をはかる「完全に新しい何ものかである」かれの思想に、「いかなる既存の名称をつけることも断わる」と、慎重にしかし決然とのべ、無法の法たる「反共法」との闘争を現にいま、展開している。かれは、法廷において一貫して朴政権との対決姿勢を崩さず、かれを共産主義者にしたてあげようとする検察官の主張にたいして、その主張の不当性、ナンセンスを事実によってひとつひとつ論破するやり方をとっている。「マルクスが花を花と呼んだとて、なぜ私が花を指して花と言つてはならないのか」(「良心宣言」と、身を挺して真理を守るかれのたたかいに日本の労働者階級は手を拱いていいのか。だからといって、われわれが、金芝河は共産主義者でない」と証明してみせたところで、検察官や裁判官、つまり朴独裁政権はなんら痛痒を感じないだろう。なぜなら、朴政権は共産主義者だから金芝河を起訴したのではなく、かれの革命的思想と創作活動が韓国民民主化闘争に及ぼす巨大な影響を肉体もろとも抹殺すべく「反共法」をもちだしたのだからだ。さらに、そのうえに、たとえ善意からであつたとしても、それは金芝河の思想をゆがめてしまふだろう。なぜなら、「反共法」撤廃をめざすたたかいなき韓国民民主化闘争はありえないからだ。

金芝河は法廷において徹底してたたかい、論理では敵を敗北に追いこむだろう。にもかかわらずは不敵な暴力によってかれの生命を奪おうとするだろう。われわれに与えられたかれの生命を救う方法は、かれのそのようなたたかいに支えられ、かれの革命的な思想を防衛しながら、どんなに小さな活動であれ、実効のある具体的な救援と連帯の運動にとりくむことである。

わたしは、このような活動をわれわれに要請しているかれの革命的な法廷闘争、およびそこで展開されている宗教観などについてまったくふれることができなかった。

われわれは、まだまだ、金芝河をはじめとする朝鮮南北の民衆から多くのものを学ばなければならない。

注1 『社会評論』6号。

注2 レコード『金芝河・詩と唱と言葉』のジャケット 訳・鄭敬

注3 『金芝河作品集1』 井出愚樹訳・青木書店 以下指定なき引用は井出訳。

注4 同名のレコード 発行・日韓連帯連絡会議。

注5 『金芝河作品集1』

注6 エンゲルス 『ポーランド人の声明』

注7 レーニン 『マルクス主義の戯画と「帝国主義的経済主義」とについて』

注8 在日朝鮮人作家金達寿(キム・ダルス)は、金芝河の思想と文学に強く共鳴しながらも、「それにしても、わが朝鮮の文学者たちは、どうしていつまでもこういう『政治的』なこと

にまで力をついやさなくてはならないのであろうか、と思わずにはいられないのである。」と書いている。(三一書房刊『金芝河』所収「朝鮮における文学と政治」)。わたしは、革命的な創作活動によって政治と文学を統一させている金芝河の思想を、かれがどれほど理解しているのか疑うものである。それにもましてわたしが恐れるのは、変革の武器として文学を甦らせつつある金芝河の仕事を、朝鮮民族のおかれた歴史的条件からくる制約のなかに特殊化することによって、政治と文学のあるべき関係を正しく闡明した金芝河の発言を歪めてしまわないか、という点である。わたしは、それを特殊化することよりも、一般化するほうに価値を見いだすべきであると思う。

注9 『金芝河作品集1』

注10 『マヤコフスキー選集I』(飯塚書店刊) この評論がかかれたのは一九二六年。

にまで力をついやさなくてはならないのであろうか、と思わずにはいられないのである。」と書いている。(三一書房刊『金芝河』所収「朝鮮における文学と政治」)。わたしは、革命的な創作活動によって政治と文学を統一させている金芝河の思想を、かれがどれほど理解しているのか疑うものである。それにもましてわたしが恐れるのは、変革の武器として文学を甦らせつつある金芝河の仕事を、朝鮮民族のおかれた歴史的条件からくる制約のなかに特殊化することによって、政治と文学のあるべき関係を正しく闡明した金芝河の発言を歪めてしまわないか、という点である。わたしは、それを特殊化することよりも、一般化するほうに価値を見いだすべきであると思う。

国鉄詩人

第115号 300円

△エッセイ▽

モスクワの二日間

シンガポール行

△作品▽

星雲

代議員選挙

美容術について

血糖種族・ゲリラ

かち合い

だからこそ

D五一挽歌

松田軍造
遠藤恒吉

今井朝二

吉見正典

高橋兼吉

藤田励治

間紋太郎

松浦正雄

今田卓三

国鉄詩人連盟

千代田区南千代田
荒川区東上野
東京都荒川区
東京4区

注11 『金芝河作品集2』に「闇と炎の日々」と題してまとめてある。

注12 前掲書では『黄土』以後の作品としてあるが、「ソウル」は『黄土』以前の詩「花のように」を改作したものである。

注13 『季刊三千里』一号で金芝河から直接聞いた話として、鶴見俊輔はつぎのように語っている。「金芝河と話をしている時に出たのですが、金芝河は初期のドイツの表現主義とか、ああいうものはかなり影響を受けている美学科の学生だったし、随分読んではいらぬですね。」なお蛇足的につけ加えれば、金芝河は、在学中フリーチェ『芸術社会学』、ルカーチ『歴史と階級意識』をドイツ語版で読んだと、ことし五月十八日の法廷で検事尋問にたいする反証としてのべている。これらの二書も検討の対象となったのだろう。

注14 この小論ではマヤコフスキーやブレヒトやプレヴェールの影響を示唆したが、エリユアールの「自由」と金芝河の「灼けつく渴きで」を較べてみても興味深い。

注15 『一八五九年五月十八日付ラッサールへの手紙』

注16 『ヘーゲル法哲学批判序説』

注17 『金芝河裁判・裁判記録と獄中メモ』 編集・発行 金芝河らを助ける会。

注18 『民族のうた、民衆のうた』(『金芝河作品集1』所収)

注19 『金芝河 民衆の声』 金芝河作品集刊行委員会編訳 サイマル出版会。

注20 邦訳なし。

注21 『長い暗闇の彼方に』(渋谷仙太郎訳・中央公論社)、『金芝河詩集』(姜舜訳・青木書店)に所収。ここでの引用は前者

による。

注22 「チノギ」の漢字表現には「鎮悪鬼(悪鬼を鎮める)」と「真五鬼(真の五賊)」の二つの解釈があり、井出氏は「消息筋によると」作者は後者を意図したとしているが、前者を「悪を鎮める鬼と」解釈して不採用とする井出氏の説には無理があつて、戯曲の内容からいえば前者が妥当のようであるが、それぞれが未確認なようなのでここでは「チノギ」とした。

注23 渋谷氏の訳注。

注24 『プレヴェール詩集』(嶋岡長訳編 飯塚書店刊)

注25 金芝河はことし五月十八日の第三回公判で、「一九七三年頃、農村協同体問題に手をつけはじめた時(「チノギ」執筆のことか?)、バーナード・ホワイトマンというアメリカ人のアジア問題専門家より、政府が推進するセマウル運動の基本骨格には、中共の初級合作社、翻身運動等の方法が修正なしに大々的に借用されていることをきき、(毛沢東思想に)関心をもつようになった。」といい、いくつかの文献を読んだと証言している。したがって、この違いを自覚したうえで金芝河は「チノギ」を書いたと推察される。 本手

追記 金芝河の作品集としてはほかに『不帰』杏恢成訳・中央公論社がある。ここに収録されている『「恨」こそ闘いの根源』は他書にない。